
月下に待つ

むぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月下に待つ

【Nコード】

N7730N

【作者名】

むぎ

【あらすじ】

王宮を去る友人を見送り、残された俺と彼女は月夜に吐息をつく。これまで友達以上恋人未満の関係で居続けたのも友人の存在があればこそ。その彼が居なくなった今、華やかな王宮の隅でひそやかに息づく、身分違いの恋の行方は？なぜか社交界では女性陣から（煩わしくも）人気の貴公子と、清楚でおとなしく（地味な）侍女のお話です。

第1話

最後の弦の震えがやみ、空気がまた平らになった。

俺はまだ身動きできずに、どこかに音の粒子が残っていないかと耳を澄ますけれど、キャッチしたのは隣のひとの小さな吐息。ちらりと横目で確かめると、ふっくらした頬が月影にも明らかに桃色に染まっている。

「すてきだったわ、エド……」

かわいい娘からの夢見心地の称賛に値するエドの演奏だった。

二人だけの観客にエドはにこりと笑い、迷いなく楽器を片づける。アンコールは受けつけないよとばかりに。そして俺ももちろん、未練を訴えるつもりは毛頭なかった。

「元気でいてね、どこにいても」

娘のほうは寂しげに彼を見つめていた。

俺とエドと娘は、この華やかな社交界のほんの片隅で、ひっそりと友情を育んできたのだ。それにはエドの音楽が欠かせなかった。彼は宮廷オーケストラのメンバーだったのだ。そして今日限りでその肩書きには「元」がつく。

去っていく彼はいつも通りの穏やかな様子である。

「そのうち僕の故郷の地方へ遊びに来てよね。きっと僕は、幸せな顔で迎えると思うからさ」

「エドはいつも幸せそうよ。ね、若子爵様」

同意を求められたので俺は我に返り、ああと頷いた。

明日には出立するというエドは、旅立ちの準備が残っているからと言って、長居をせずに別れを告げた。笑顔のままあっさりと扉の向こうへ踏み出し、「じゃ」と一言を室内に残しただけだった。

ボタン……と閉まる音が、また空気に波紋をつくり、やがて消える。

「……行っちゃった」

残された俺と娘は気がぬけてソファにもたれる。

エドの演奏を楽しむ時の常で、部屋は灯りをともしていない。満月がじゅっぶんな光を放っている。先ほど愛らしく色づいていた娘の顔色は、今は沈んでいた。

「こちらへ来いよ」

と一応誘ってみる。来ないだろうと思いつながら。彼女は慎ましやかな性格だし、侍女という身分を弁えているからだ。

俺は待たずにさっさと自ら移動した。

窓の外からは今宵の宴のなごりが垣間見える。国王の生誕祭だったのだ。贅をこらして着飾った人びとが、互いの美しさを褒めあつて満ち足りた夜を過ごしていることだろう。そんな王侯貴族の常識に逆らうかのように、俺とエドと彼女は、語り合つて音楽を聴いて寝息を立てるといふ、実に清廉な集いをつづけてきたのである。

それに慣れている娘は、急に横へ移ってきた俺に、ちょっと慌てた。

「あ、ええと……」

おろおろしながら、反射的に逃げたくなるのを我慢するように硬直する。

何も肩を抱き寄せるのは今回が初めてではない。二人きりになる機会があれば今までも、軽くからかつては彼女の初々しい反応を楽しんできた。だから俺は今日もたいして遠慮せず、また彼女の心情も斟酌せず、その頭を己の胸に押しつけてやった。

「エドはここにいるよりもっと幸せになるさ。だから悲しむな」

腕に抱いておいて話題は友人のことだ。そうすれば娘の強張った体から多少抵抗がゆるむのを知っているから。

「分かっています、でも何というか……変わらぬものなんてないのかなって思うと……」

「ああ、多分ね」

今度の俺の同意には、確信がこもっている。

エドが去ることで、3人で成してきた調和が否応なしに崩れる。微妙な関係にある俺と彼女の間も、何かしらの変化を強要されている。

しかしどこまで彼女はそれを理解しているのだろう、間近にある彼女の表情はただひたすら寂しそうであった。

第2話

王都にある屋敷にはふだん俺一人が住んでいるので、いつ帰宅しようと思えば自由気ままだが、現在は生誕祭に出席するために両親が滞在していた。王宮で一夜を明かして昼ごろ悠々と帰宅した俺はさっそく母親に捉まってしまった。

「どなたと？」

と、簡潔に。

「お尋ねになるだけ無駄なものですよ」

当然ながら昨晩は清らかに終わっている。

面倒くさいので軽くあしらう俺の前にむんずと立ち、母親は鼻息が荒い。

「本当に信じられなかったわ。舞踏会にエスコートすべきお連れの女性がいないなんて！男として恥だとは思わないの」

「別に思いませんね。それに母上のように滅多に王都へいらっしやらない方はともかく、大方の連中は俺が独りで来るのに慣れていましてから今さら驚きもありませんよ。母上が何と仰るうと、これは俺のスタイルです」

「珍妙なことを言うのね」

毛の生えた魚を見るような目で母親が有り難いコメントをくれるも、俺は横を向いて聞き流す。

舞踏会の入口を跨ぐ時は独りでも、ダンスが始まる頃には適当なパートナーが勝手に現れてくれるので、特に困ったことはなかった。昨晩もその調子で、次々にご令嬢たちが俺とダンスしたのを、母親も目撃しているはずだ。

「あのお嬢さん達の中からどなたか一人、生涯の伴侶を決める気は

ないの？」

「執念深いですね、母上も。俺が独身主義だとは御存じですよね？」

「まあ虚しいことを」

今度は母親があっさり聞き流す番だった。

もちろん俺のような立場にある者が独身主義を標榜するのは一種の逸脱行為だ。しかし、これはレノワ家現当主である父の黙認があつてのこと。いわば俺が勝ち取った権利なのだから、母親も責めにくそうにしている。それで彼女は専ら、「家族っていいものよ」と情に訴えようとするのだ。

我がレノワ一族は温和な家庭を築く者が多い家系で、たとえ親同士がまとめた政略的な縁談であっても、割とうまくやっていくカッブルが大半である。両親もそうだし、兄夫婦もそうだ。

兄夫婦のほうは順調に、待望の第一子を妊娠中である。孫の顔が見たいならそつちで満足してくればいいのに、と俺は思った。

いつまでも幼い息子感覚で小言を言いたがる母親を振りきるためにも、庭に出て剣の鍛錬をすることにした。

社交界では詩人としての印象が強いらしいし、王宮での仕事は記録係だし、どうも人から軟弱に思われがちな俺である。冗談ではないぞ。自分としてはいつでも騎士兵に鞍替えできるつもりなのだ。

一心不乱に素振りをしてじんわり汗をかく。気分が乗ってきた俺はシャツを脱いで上半身を日の下に曝した。春になりたての空気はほどよく冷感を帯び、気持ちいい。

「お相手しましょうか、フィールー様？」

執事のクリストフが剣を左手に、白いタオルを右手に持って現れ

た。

脱いだシャツとタオルを交換する。

「お前と立ち合うと、3分もせずに勝負がつくからなあ」と俺は眉をしかめた。騎士兵に鞍替えなどといい気になって夢想していたけれど、真正正銘の剣士であるクリストフを前にして俺はたちまち弱気になる。もともと彼はレノワ家お抱えの武術指南役であり護衛だったのだが、いつしか俺の側近めいた役回りが増え、気づいたら執事もこなす何でも屋になり果てた。

予想に違わず、容赦なく打ちのめされること30分。悔しかったが「負けました」と認めて終わりにしてもらった。忌々しいことに頭を下げて首を晒さないと許してもらえないのだ。子どもの時から一貫した決まりごとであり、ゆえにいつまで経っても自分がクリストフの主人だという感じがしない。

息切れもせずに涼しげな執事はニコツと笑った。

「フィール様は素直でよろしいことですね」

嫌味が、クリストフ。

汗を洗い流して二階にある自室に戻り、届いていた郵便物に目を通す。あちこちからサロンだの茶会だの演奏会だの各種催し物への招待状が来ている。

皆よく飽きないな……。

率直に言って社交は嫌いだ。できることなら身を潜めて静かに暮らしたい性格である。しかし何の因果か子爵家の跡取りなどに指名されている以上、最低限度の付き合いはしなければならぬ。

俺にとっては不幸なことに、他人より多少ましな容貌と詩歌の才

能を授かって生まれたせいで、俺はご婦人方に受けがいらしかつた。どんなに素っ気ない態度を取っていようと、ものともせず招待状は降ってくる。

ああ、兄が健康だったら良かったのに、世の中うまくいかないものだ。

と、どんどん封を切っていく、最後の一通を一瞥したとたん、しぜんと俺の背筋が伸びた。

封筒に差し出し人の名前はない代わりに、鮮やかな封蠟が目飛びこむ。国花たるアイリスの意匠は王族のみに許されたデザインであり、蠟の色によって個人が特定できるのだ。若草色のアイリス、それが象徴する人といえば。

5月に行われる詩会のために貴君を招聘したい。一週間後の水曜日、『詩集から読み解く古代文明』の本を持参せよ。

次期王位継承者ベルナル殿下の正妃、マルグリット妃殿下からだったのだ！

王太子妃争奪戦とでも銘打つべき、騎士兵も真つ青の熾烈な「女の競争」を勝ちぬき、見事花嫁の栄冠を獲得したその人だ。王宮でおつとりと育った王太子などつくに尻に敷いている、まさに女傑タイプ。

間違つても、サロンに夢中なご婦人方のように俺の見てくれに誤魔化されてはくれない人物である。面目が何であれあんまり御前に伺いたくはないのが本音だ。

それに気が進まない重大な理由がもう一つ……。

俺が気を許す唯一の娘と、人目のある場所で向かい合いたくはなかった。彼女との関わりは王宮生活の裏側にのみ仕舞っておきたいのだ。たとえ視線を交わすことさえ避けたとしても、表側で会いたくはなかった。

しかし諦めるしかない。

俺はバルコニーに出た。この邸宅は小高い丘の斜面に建っているため、ここからだ和王都の街並みが眺望できる。王宮は真反対の方向にあつて見えない。

第3話

王宮での俺の執務室は資料室の上階にあり、資料室は王宮の四方に建つ尖塔のうち北東の塔に設けられている。

先日の生誕祭の詳細な記録をまとめ終わり、上官のチェックも済ませた俺は、階段を下りて書庫へ向かっていた。マルグリット妃殿下ご所望の本を探すためである。一般民にも開陳されている王立図書館にあるだろうと、数日前にクリストフを差し向けたのだが置いてないとの報告だったので。

書庫は一般向きではない学術用資料や、俺たち記録係が編纂する史記などが収められている。だから出入りするにはふつつ許可が必要なのだけれど、俺は職権として顔パスで通れるのだった。

王宮の中でも北の辺鄙な場所に位置するのが難点だが、まあ散歩と思おう。

のんびり歩いている途中のことだった。

「フロローネ、元気出してよ」

聞きなれた名前にどきりとする俺に気づかない様子で、厨房から出てきた数人の侍女たちがティーセットを運ぶ後ろ姿がある。

輪の中にそのフロローネがいる。鳶色の長髪を左右に分けて結わえた清楚な娘。厨房の出口越しに一瞬視線がかすったような気もしたが、錯覚だったかと思うほど彼女は完璧に俺を見ず、仲間たちと会話している。

「仲良さそうだったもんねえ、あの音楽家と。かわいいそうに」

「恋人だつたんでしょ？」

「今から追いかけて行きなさいよ。この際結婚を迫ってさ、一緒に暮らせばいいじゃない」

俺は急に考え事をしなくなつた、みたいな顔をして柱に寄りかかり、耳を澄ませる。

「ううん、ありがと……。まさか離れる日が来るなんて思つてなかつたからさ……。こうなつたら彼が元気でいるのを祈るのみ、ね……。」
湿つた声音のフローネを、侍女たちは声をそろえて「また新しい恋を見つけなさい」と励ましつつ階段を上つて行つてしまった。

……周囲がそう認識していたのは知つている。穏やかな雰囲気か似ているエドと彼女は、誰が見ても似合いの組みあわせだつた。侍女と宮廷音楽家なら身分の問題もないし、どちらも敵を作らない温厚な性格とくれば、知る人ぞ知る和み系カップルとして周りの応援を集めていたのだ。

バラバラの立場を越えて稀有な交友を持つた俺たちは退屈な貴族たちの興味を惹きやすい。中でも貴婦人方は俺の近くにいる女の子にどんな悪意を向けるか分からない。だから、エドとフローネが恋人同士だという周囲の誤解をむしろ煽つてきたのだが……。

これからはその手も使えない。

書庫番に片手を挙げてあいさつし、俺は本探しに気もちを入れ替えた。いつ来てもここは人気がない。俺にとっては王宮のオアシスだ。

天井までぎつしり詰まつている本棚の一段一段に目をこらし始めてしばらく、入口が開く音が聞こえた。珍しく誰か来たのかなと様子をつかがっていると、書庫番の爺さんだつた。

「ほい、これ。預かりましたんで」

「ん？」

手渡されたのは小さく折り畳まれたメモ用紙。

お探しのものはタイトルが違います。正しくは『詩集から読み解く古代の伝説』です。

え？

俺は意味が分からず瞬きをし、ごく短い文を何回か読み直して爺さんへ視線を戻した。

「どちらかは存じませんが侍女の娘さんでしたよ」

的確に質問を察した爺さんは肩をすくめ、自分の定位置へと引き返して行く。

結局、書庫にそれらしき本はなかった。メモのタイトルで再度王立図書館を調べてもらうと、今度は当たりが出た。

執事が徴用してきた本の前に、俺は唸る。

「さすが、怖いな妃殿下は。さらりと腕試しか……」

いやいや、もちろん、妃殿下からの伝言が故意に違っていたとは限らない。古代の文明だろうが古代の伝説だろうが、どっちでもいいじゃないかと思いたくなる些細な話だ。

しかし膨大な蔵書数を誇る王立図書館で探す場合、タイトルのわずかな違いも致命的である。走り書きの助言をもらわなければ、何も気づかないまま本が見当たらぬと青ざめ、手ぶらで参上する羽目になっていたかも知れず、想像するだに苦々しい。

そして恐らくこれは罠だったのだろう。

指定日に面会に行き本を差し出すと、マルグリット妃殿下は「あらタイトルを伝え間違えていたのね、悪かったわ困ったでしょう」と言いながら案の定、不敵に笑った。

たぶん貴公子の面々に似たようなことを仕掛けては、器量を測っているのだろう。どこまで気がつくのか、どんな対処をするのか、どう訴えてくるか。

この妃殿下は王太子の御世になったらすばらしい実権を握るに違いない。覚えを良くしておこうなどという欲がさらさら湧かない俺は、ただ、弱点を掴まれないよう気をつけなければと思った。

詩集に関する質問を幾つか無難にくぐり抜け、あいさつをして背を向けた俺は素早く退出した。

入口付近に、他の大勢の侍女にまじってフロアーネが見送りの礼を取っているのを黙殺して。

「相変わらずつれない殿方ですわ」

「ほんとうに」

閉まる扉のすき間から女どもの早速のおしゃべりが聞こえてくる。これを無視するのは全くもって胸が痛まないのだが……。

執務室に戻り吐息をつきながら、今夜フロアーネと会わなければと思った。いつも会うのは舞踏会だとか音楽会だとか、宮廷で開かれる大規模な催し物の夜に限っていたのだが、今日ばかりは強引にでも会わなければ。

彼女を無視しなければならなかった一幕を思い出すと、多少の軽はずみにも目をつぶろうという気になる。人を介して呼び出しのメモを渡してもらおうよう手配した。

その日、夜更けに王宮の裏で待つ俺を、半分近く欠けた月が重た

げに照らす。

さほど時間が経たないうち、木立の陰から妖精が舞い出たように、スカートをなびかせて娘が走り寄って来た。

「大胆なことをなさいますね……」

すこし恨みがましい口調であった。主や朋輩に察知されないよう抜け出してくるのは骨が折れたのだろう。

「メモを書庫番に渡してくれただろうか？」

真つ先に言うと、たちまち彼女は柔和に笑った。

「ああ、そのことね。無事に伝わって良かったです。マルグリット様がお戯れに私たちに向かって種明かしなさって、何人合格するだろうかなんて仰っていたから。なんとかして教えなくちゃと焦っていたらあなたが書庫のほうへ行くのが見えて、もしかして本をお探しなんじゃと思ったので、咄嗟に」

「そう」

ふわりと小さな体を抱き寄せて、俺は彼女の瞳を覗きこむ。

「助かったよ、礼を言う」

途端、顔から湯気を出しそうに熱もったフローネの様子に俺も満足したものの、これで用件は完了したことになる。じゃあ帰りますね、なんて言い出される前に、夜更けに密会というこの美味しい状況を余さず堪能しようと思うのは当然であろう。

俺は人嫌いの無粋な男なので、こういった場面で女性をリードする技は持ち合わせていない。にも関わらず、彼女を絡めとるのは容易かった。意味深長に見つめてやるだけで、魔法をかけたように扱いやすくなる。

「と、ところで例の事、ちゃんと調べてくださいましたか？」

滑らかな両頬に手を添えたとき、フローネが盾を構えるように質問してきた。

「うん？」

「例の事です、アーフォオルグ家の」

慌てて口を塞ぐと同時に周囲を鋭く見回した。

形にならない風が黒い梢をざわざわと鳴らす。不吉な風も偶然とは思えない、彼女が口にしたのはそういう響きを持つ名前なのだ。

アーフォオルグ伯爵家。

古くから連綿と続く由緒ある家柄だが、ある年の秋、あるうことが王宮で放火事件を起こした姫君がいた。王家に怨恨を抱いたゆえの犯行だったと言われている。過去の事件とはいえまだ数年前のこと、罪の重さを考えれば今でも好んで話題にする馬鹿はいない。俺だつてその名前を不意打ちで聞きたくはないぞ。

申し訳なさそうに目をしょんぼりと垂らしたフローネの前髪をかき分け、額を撫でた。

正確には火傷の痕を。

第4話（前書き）

今回は過去の回想編となります。

第4話

作物の豊穰を祝う秋の祭祀の日のことだった。
式の開始時刻までもう少しという時間帯。

人出が足りないということとで警備の一員に借り出されていた俺は同僚と会話を交わしながら裏のほうを回っていて、ふと異変に気がついた。

「煙……？」

「なんでこんな所で」

ポカンとつぶやく同僚を尻目に、なんだか嫌な直感を覚えた俺は足早に近づいて 倉庫の一つからむわっと押し出される煙はますます量を増し 出口を求めて立ち往生している黒煙の合い間に人影があり 。

「火事だ、人を呼んでくれ！」

夢中で後方の同僚に怒鳴ると、俺は中に飛びこんだ。

とたんに目がしみて、あわてて半目になりながら影にたどりつく。炎は奥のほうで燃え盛っていた。

火は遠い、大丈夫。二人いる。女。一人が倒れている。とっさに読み取った情報はそんなものだったと思う。

動転していたので、まさか倒れている女がフローネだとは気がつきもしなかった。それよりも、その女がひどく苦しんでいるのと、もう一人の女がひどく反乱狂だったのとで、二人を無事に連れ出すほうに懸命だったのだ。

「いやよ、死ぬの、あたしは死ぬの、放してえ……！」

それがアーフォルグ家の姫、ポーラだった。

後から判明したことだが、フローネはそのポーラ姫の尋常ならざる様子に気づいて助けに入ったらしい。祭祀のために用意され倉庫に収納されていた薫の残りにポーラ姫が放火した後も、炎に巻かれながらなんとか姫を建物の出口付近までは引つ張ってきたが、運悪く、熱した火の粉か何か飛んできて負傷してしまい、昏倒していたのだ。

式典の開始時刻が迫っている時間帯だったことと、人気のない倉庫群での騒動だったことを考えれば、俺たちが発見できたのは幸運以外の何物でもなかった。

あともう少し救出が遅れていたら命はなかっただろう。

神聖な祭祀にとんでもない汚点をつけた騒動の、余波は長く残った。

「嫌な雰囲気のパティーだったね」

事件から一月ほど経ち、長雨が一定のリズムで屋根を打つ夜、エドはぼやきながら集会所にやって来た。もちろんそこにフローネの姿はなく、男二人での湿気た会合だった。

「あの事件の話で持ちきりだった」

「仕方ないさ、動機が動機だから。王太子の花嫁に選ばれなかった恨みを晴らすとして　なんてスキヤンダルもいいところじゃないか？皆この手の話は大好物だぜ」

マルグリット姫やポーラ姫を含め、数名の候補によって激的な王太子妃争奪戦が繰り広げられていたのは記憶に新しい。最終的に勝利の栄冠を獲得したのはご存じの通りマルグリット姫だったが、内定の宣言が出たのは今年の晩夏であった。

「分かるけど、そんな軽々しい話じゃないでしょ？ 罪もない人が善意で助けようとして巻き込まれたんだよ、許せないよ。それもフローネはマルグリット様の侍女なんだよ、言ってみりゃポーラ姫とは敵対関係なのにな……」

「お人好しだからな」

「お貴族様にとっては瑣末な被害者なのかもしれないけどさ！ 可哀想に……容体はどうなんだろう？」

用意した軽食には手をつけなのまま、俺もエドも神妙に酒のみを呷っていた。

エドが憤慨する通り、大方の貴族にとっては単にポーラ姫のスキヤンダルが刺激的なだけで、巻き込まれた侍女など話題にも上っていない。

しかし俺たちにとっては深刻だった。どうやら頭部に飛来した火の粉が跳ねたのか、それとも煙にやられたのか、被害は目に及んでしまい、視力が失われる危険もあるようだ、と教えてやるとエドは絶句してしまった。

もはや酒も飲んではいられなかった。

「……フィールーは落ちついてるね。平気なの？」

赤く目を充血させて一言俺にぶつけたきり、エドは膝を抱え込んで涙ぐんでいた。心優しい友人に返す言葉をしばらく探したものだ。

しかし正直なところ、俺の心境はエドと相違があった。俺は壮絶な現場を目撃している。負傷者がフローネであることに気づいた時のあの衝撃は言葉にならない。手遅れなのではと考え出すと氷の手で心臓を鷲掴みされたような恐ろしさだった。だから、命さえ助かるならば何を引きかえにしてもいいじゃないか、……とも思える。

振り返れば、身内以外の人間に対して、こうまで劇的な感情を抱くのは初めてであった。

「……エド、心配するな。実は目の治療に関しては我がレノワ家の得意分野なんだ。兄の体の具合でな、いろいろ医者や薬を集めて研究させたんだ。もう少しフローネの容体が落ちついたら、うちで預かるように手配するつもりでいる」

「え、そうなの？」

エドは驚いて聞き返した。

「本当に偶然だが、兄は何年か前に大病を患って、失明したんだ。その時は手を尽くしたんだが、今はもう治療は諦めて、跡継ぎも俺にゆずって田舎で暮らしている」

「そうだったの……」

「フローネの役に立つだろう」

とは言っても彼女はマルグリット・グラスグリーン家の侍女であり、主人に全ての権限がある。俺もレノワ家の跡取りだ。身柄を預かって治療するにも事はそう単純な話ではなく、交渉は政治取引の様相を帯びいろいろ時間がかかってしまっ、フローネを預かることができた頃には季節が変わっていた。

あの冬は、俺にとって忘れられぬ時間だった。

ゆっくり療養を積み重ねたおかげかフローネは視力も含めて全快にこぎつけたのだが、その時にはアーフォルグ家の処理も済み、忌わしい事は忘れようとはばかり、王都も王宮も事件をのみ込んでしまった。

第4話（後書き）

こんな拙いお話でも読んでくださる方がいらっしやるようで、感謝の一言です。ありがとうございます。

気になる点などありましたら、ぜひご指摘ください！

第5話

翻って、今さらフローネはアーフォルグ家の何を知りたいのだから。

「まあ、以前に言いましたよ。全然話を聞いていらっしやらないのね」
と、娘はちよつと頬を膨らませる。

「伯爵様についてです。アーフォルグ伯爵。ポーラ姫のお父様。失脚なさつて以後、どこで何をしていらっしやるのか気がかりで……だつて伯爵様はすごくいい方だつたんだもの。何回か用事でお話したことがあるけど、わたしののような身分の者にも親切にして下さいました」

なぜか彼女の顔が赤らんできた。

アーフォルグ伯爵は40代前半ほどの品位ある立派な紳士だつた。ポーラ姫が仕出かした稚拙で恥知らずな所業に対しても、彼は父親としての責任から逃げなかつた。国王陛下ですら彼の仁徳に免じて処罰を割り引いたとも噂されたが、そのへんは密室で決議されたことなので詳細は明らかになつていない。

ともかく目下の使用人に対しても礼節を払える人物だつたのである。基本的に人を疑わないフローネの純真な目には、崇高な聖人君子に映つたかもしれない。

しかし相手は中年男性なのだぞ。なのに彼女が浮かべる表情は、何と例えたらいいものか、甘酸っぱい初恋の思い出に胸を焦がしながら今もなお忘れきれず花占いをするような、そんな感じ。

面白くない……。全然面白くない。途端に俺はかわいい娘を意地悪く追いつめたくなった。

「情報が欲しいというわけだ。じゃあ代わりに何をくれる？」
「え？」

不穏な空気に本能的な恐怖を感じたか、彼女は腰を引こうとするけれど、許しはしない。逆に反動をつけて手前に引き寄せる口実にしてしまう。

いつの間にか半月はちぎれ雲に隠され、光量はいつそう乏しくなっていた。きれいに枝打ちされているとはいえ広葉樹の幹が等間隔に並び、視界を遮っている。俺は周囲への警戒もどうでもよくなるほどに間近の獲物に心を奪われた。

「何を……何を差し上げたら？」

聞くなよ、いちいち。

断っておくが、口づけも決して初めてではない。

ただし酒に酔ってもないのに、苛立ちだけでキスしたことはない。乱暴で執拗なそれを受けて、驚いたフローネが押したり引いたり抗う様子を見せたのも一時のことだった。だんだんいい具合に力が抜けてきて、しかし時々抵抗を思い出すのが微笑ましく、気づけば怒りなど忘れてしまった。

存分に口づけを味わい尽くしてようやく解放した時、フローネは振りほどくようにして俺から離れた。

「こんな所で……！誰かに見咎められたらどうするんです。こうし

てお会いしているだけでも弁解の仕様がないのに」

俺は衛兵の巡回ルートを把握しているのではあと5分ほどは問題ないと知っているが、彼女は月夜にも明らかに顔色を失くして周囲を見渡していた。

「このようなことはお止め下さい！噂が立ってしまったらあなたの評判に傷がつきます」

「フローネ」

「今日だって人を使って呼び出されましたね！？同僚に目撃されて言い訳に苦労しましたよ！あなたと親しいというのでわたしは結構不審に思われているし、ましてやもうエドが居ないんです。言い訳ができないんですから、お願いです……せめて誰にも知られない所で……」

彼女の訴えは尤もだった。なら人に知られない場所なら、この続きをしてもいいのだろうか。

長い髪の毛が幾筋か背中に流れる様が夜目に美しく、つい今しがたの陳情も無視して引き寄せられるように手を伸ばす。娘は困り果てた様子であったものの、髪を撫でる男の手を撥ねつけるまではしなかった。大人しく身を任せ、そのうち失くしていた顔色に血が通い上がる。

このまま何もかも忘れて彼女を奪えたら。急にそんな欲望を掻き立てられるほど、今の彼女は魅力的だった。

しかし俺の優秀なる理性は、今日はここまでだと冷静に告げている。

「……悪かった。もう呼び出さないから、詩会の後に会おう、いいか」

絶対に人には知られないようにすると約束すると、声もなく彼女

の頭が縦に揺れた。

妖精が去った後にも思わせぶりに月と雲が戯れていた。

場所を変えるため王宮の建物を突っ切った。騎士装束をつけた衛兵が俺の顔を認めて敬礼する。

日中は煌びやかな貴人たちが蜜に惹かれる蝶のごとく群がっている庭園のベンチも、夜は趣きを変え、眠れない苦惱者をそっと待っている。周りには様々な種類の植物が植えられ、その大部分がこれから見頃を迎える花々だった。

詩に歌えそうな風情である。

こんな時エドがいて欲しい。彼の得意な古代曲を悠々と奏で、太古の記憶を呼び覚ますがごとき音色を切なく聞かせて欲しい。

分かっているとも、俺は矛盾している。もしエドが居続けたのなら、永遠に3人の友情を保とうとしただろう。俺は娘に淡く好意を抱いたまま、しかし己の意思を方向づけることはなかったはずだ。

俺は無意識に背面の植物をまさぐり、茎をポキリと折った。

まだ蕾だったそれを撫でつつ、どのくらい俺は月下の岐路に佇んでいたことだろう。クリストフが呼びに現れるまで俺は身動きができなかった。

第6話

俺の軽率さはすぐに警告の矢となって返ってきた。

「どつぞ」

豪華絢爛な客間に通されてすぐ、俺を呼び出した男は神経質に髭を整えながら現れた。その後ろから美人侍女がティーカップをトレイに持ち、輝くばかりの笑顔で俺に流し眼をくれる。

よく遭遇する光景なので俺は特に興味も惹かれない。ただし、この館の主人の眼前で華やかに色気を振りまく度胸には感嘆する。

何しろグラスグリーン侯爵といえば最も勢力を持つ名門貴族。国王陛下の脇を固める重臣である上、マルグリット妃殿下の父親でもある。今現在そして未来にわたり、確固たる権力を掌握し続けることは疑いの余地もない。

そしてさすがはマルグリット妃殿下の父親というべきか、政治家としての辣腕は時に苛烈で容赦なく、本当に人の血が通っているのかと思うほど隙を見せない人物である。

俺のような若輩者とは格が違うのだ。

そんな人物が、なぜか俺を私邸に呼びつけたのである。何の用件なのか見当もつかない。侍女の媚びなど緊張をほぐすどころか逆に神経を逆撫でするだけであった。

「そう肩肘を張らずともよい。君は当代きつての花形貴公子だよ、もう少し軽妙洒脱に構えたまえ」

と笑って見下されても、俺は実直に応じるだけだ。

「生誕祭にはご両親がお見えだったな。子爵にお会いするのは一年ぶりだった。引退されたのかと思っていたが」

顎の尖った三角形の輪郭と細い目が特徴的な侯爵は、ふんと鼻を鳴らした。

「現在ではレノワ子爵と聞けば、社交界でも名を売っている君のほうを皆思い浮かべるだろうよ。なぜ代替わりしないんだね？」

確かに皆から不思議がられる。先日の生誕祭のような格別に威儀のある式典でもない限り俺がレノワ家の当主代理として社交を務めており、実質的には家督を引き継いでいるも同然の状態だ。

しかし、本当の家督相続はぎりぎりまで固辞するつもりでいる。若輩者ですので、などと普段なら曖昧に答えておく場面なのだが。

「しかし君は独身だからな。夫人がいない当主というのは不格好だ。……代替わりを拒む理由はそのあたりかな？」

侯爵が葉巻を取り出して火をつけた。さすがに彼は俺ごときの思考などすっかり看破しているわけだった。

「どこの席でも君のつれなさはご婦人方の好物の話題だ。しかし羨ましいものだよ、これが普通の男だったら相手にもされず嘲笑されて終わるのに、君となると、孤高の貴公子などと呼んで株が上がっていくんだからな」

侯爵はそれこそ嘲笑した。一体この老獪な男は何が目的でこんなくだらない話を吹っ掛けるのだろうか、と俺は成り行きを見る。

冷静を保とうとする俺をあくまで小馬鹿にするように、侯爵は少し口元を上げた。

「しかし女嫌いだろうと何だろうといずれ子は拳げねばならんたる

う。私が腕を振るって最高の貴婦人を世話してもよいぞ？」

くだらない。俺はそう思った。だが、今のが侯爵の真意かどうか判然としない。俺は表情を崩さないよう細心の注意を払いながら、じりじりと灰になっていく侯爵の右手の葉巻を見つめた。

「私ごときに過分なお気遣い、恐れ入ります。しかし私のような者には如何なるご婦人も勿体ない。それに俺が夫人を設けずとも、レノワ家の今後には差し支えないよう手配するつもりであります」

「ご両親は不満の様子だったか？」

「父の承諾は得ております」

きっぱりと断言したのは、侯爵の言及が許容範囲を超えているからだだった。我が家の今後は我が家の問題。いくら侯爵がこの国を動かす権力の枢軸だからといって、余計な口出しをされてはたまらない。

可愛げのない俺の態度があまり面白くなかったのだろう、侯爵は表情を一変させた。もともと酷薄な印象を与える細目がさらに糸のごとく狭められ、眉間にくつきりと縦皺が寄った。

「では何のつもりであの娘を狙っているんだ。女嫌いのはずの君が、私の家の使用人と懇意にしている理由は何だ？」

はっと視線を跳ね上げると、雷撃でも放ちかねないほど暗雲垂れこめた侯爵が葉巻を押しつぶすところだった。俺の顔から一瞬血の気が退去した。

「君が裏でどれだけ火遊びしようと思ったことではないが、あの子に安易に手を出すのは私が許さんぞ」

まるで愛娘が連れてきた男友達を威嚇する父親のようではないか。
なぜ。

動揺した俺は誤魔化しようのない空白の間を生んでしまった。もはやフローネとの仲を認めたようなものだった。これほど緊迫した空気を吸うのもなかなかない経験だ。侯爵の眼力ときたら、睨み殺せるものならそうしてやる、とばかりの迫真なる勢いである。

内心はそれに圧倒されながらも、俺は腹をくくる。

「……火遊びなどと思われているならお腹立ちもご尤もかと存じますが、私は決して、遊びなどでは」

真つ向から反論したいが彼を刺激してはまずいと思い、控えめに言った。しかし結果はそう変わらなかった。

「火遊びでないなら何だ？真面目に一徹にあの子を恋うとでも？なら忠告しておくが、使用人とは深みに嵌らぬ方が身のためだぞ。悲劇を知っているからこそその親切心だ。」

「悲劇……？」

「君のような色男に付きまとわれては誰の恨みを買うかも分からん。女の嫉妬が発火したらどうなるか、あの子が一番身に沁みているだろう」

俺は己の目を疑い、耳を疑った。

常に政治家として理性と打算で行動する侯爵とは思えない、苦々しげな口調、痛ましげな表情。この方が人情らしきものを漂わせたのは初めてだ。

一体これは何なのだろう。

第6話（後書き）

また新しい登場人物が増えました。

人物関係が分かりにくくなってないといいいのですが……。

なんとか侯爵だのなんとか伯爵だの、私はしょっちゅう混乱してしまいます。

なるべく登場人物は少なめにスッキリと、と思っておりますが、もし分かりにくければご一報下さいませ。人物紹介のページなど作って対応したいと思います。

第7話

その時室内に響いたノックの音が二人の意識を引き戻した。

先ほどとは違って変わって、美人侍女という言葉とは何十年前前にさよならしたような白髪の老女が平然と現れ、侯爵に火急らしき用件を耳打ちしている。頷いた侯爵は俺に一瞥をくれたのみで、さっと出ていった。

一発触発だった室内の空気に平穩が戻ると、俺は脱力のあまり大きな吐息をついた。大きな窓からレースカーテンを透かして明光が差し込んでいるのに今さら気がつき、まだ昼間だったんだなと思った。

侍女頭と思われる老女が威厳を崩してフッフと笑い、テーブルの茶器に視線を落とす。

「せつかくですから召し上がって行かれては？」

紅茶と茶菓子が手つかずで残っている。

「若い侍女たちが張りきってご用意しておりましたから、このままお帰りになると、恨まれますわよ」

紅茶は温度も味も香りも何もかもが冷めていたが、俺は機械的に口に運び、あつという間に最後の滴まで飲みきっていた。

「もう一杯、いかがです？」

「あ……どうも」

コポコポと温かい音と共にポットから紅く染まった美しい液体が注がれ、踊るように湯気が舞い上がった。口に含むと今度は喉にほ

どよい熱が駆け抜ける。

「心配なさらずとも大丈夫でございますよ、旦那様は貴方とあの子の秘密を誰にも仰らないでしょうから」

老女がティーセット類を載せたワゴン上を片づけながらさりげなく呟いた。俺の驚愕には目もくれず、筋力の落ちた腕でゆっくり、丁寧に布巾をかけている。

「貴方には、過去に療養の件でお世話になっていきますからねえ」

冷静になりきれない脳内ではんやりと考えたことは、秘密を漏らす漏らさないに関わらず、致命的な弱点を握られたという一点だった。ここぞという場面で取引に使ってくるに違いない。

いつもの非情なる侯爵ならば。だが……。

俺は頭を振って、フローネへの不可解な情を見せた侯爵の言動を棚上げすることにする。分からないものを考えこんでいても仕方ない。

気の利く老侍女が上着を着せかけてくれた後「あの」と口ごもった。

「もしお願いできますのなら、これを、あの子に渡して頂きたいのですが」

おずおずと差し出したのは髪留め。藍色の土台に宝石の粒がチロチロとあしらわれていて夜空に星屑が瞬いているかのようなデザインだ。

あの子とはもちろんフローネのことだろう。清楚で上品な髪留めはよく似合いそうだ。

「この屋敷で今の秘密を知る者は旦那様と私のみ。私も秘密は厳守致します。その誓いというわけではないのですが、どうぞこれを貴

方様からあの子へ」

「これは？」

「先日、大掃除をしましてねえ。あの子の母親の遺品の中にこれが見つかつたものですから」

「……遺品の……」

それ以上の詳細は尋ねずに、しわしわの指先からそれを受け取つた。髪留めに浮かぶ天の川が、日光の一筋を受けて俺に微笑みかけるかのように光を放つた。

その日、夕暮れ時から雲行きが怪しくなつたかと思うや雨になり、本物の天の川は姿を隠したままだった。王宮から帰宅した俺は、馬車から玄関までの短い距離にしつとりと春雨を浴び、閑静な我が屋敷へ入る。

今日訪問したグラスグリーン侯爵邸と比べると、ずいぶん質素なエントランスホール。父親から権限を引き継いだとき、俺の趣味じやない調度品がゴタゴタと飾られているのが我慢ならず、ほとんどを撤去させてしまったからだ。ホールで唯一生き延びたのは天井から吊り下がる瀟洒なシャンデリアくらいか。気に入らない物に囲まれて生活するくらいなら何も無いほうがマシだという信条に従つて、飾られている美術品は厳選されており、屋敷内にはまだまだ余白が多い。

さらに出迎える使用人の数も多くない。けれど少人数ゆえに気心の知れた連中である。特に、俺の帰宅を聞きつけて真っ先に出迎えるの位置についた使い走りの少年は、屈託のなさで屋敷の雰囲気を盛り上げている。

「上着を預かりますよ!」

子犬のような満面の笑顔で少年ミミルが背伸びをした。まだ10歳の彼は主人のコートの着脱を手伝える背丈でない。

肩から滑り落とした時、胸元のポケットの膨らみに親指がかすった。そうだ、フロローネに渡す髪留めだ。

「……ミミル、お前ラッピング出来るか?」
「へっ?」

いや何でもない、と俺は真顔でその場を後にする。いつも通りに衣裳部屋に入ったが、準備してあるはずの室内着が置いてなかった。袖のボタンを解いているとクリストフが「すみません」と衣類を持つて来る。

「完全無欠の執事にしては珍しいな」
からかうと、彼はすぐさま応酬態勢になった。

「ラッピングくらいお任せ下さい」
俺が遮る間もなくクリストフの手がポケットの中身を攫う。さすがは凄腕ボディーガード、などと感心している場合ではない。俺はクリストフに何一つ打ち明けてはいなかった。

「女物の装飾具。……なるほど、貴方様は完全無欠に女つ気がないと思っていました、珍しいですねえ」

矯めつ眇めつ無遠慮に小物を眺めながら、彼はにんまりと笑った。後でたっぷり事情聴取しますから、と笑顔が宣言している。

これまで細心の注意を払って行動してきた成果が、今日一日でロボ口と崩壊していくのは気のせいか?

食事と入浴を済ませ、二階にある寝室に引き上げると、クリスト

フが勝手にワインの準備を整えて待ち構えていた。弁解を聞こうと浮き浮きしている。

名誉のために言い添えておくが間違つても彼は普段、こんなに軽薄ではない。もう30歳を越した有能な大人の男で、頼りになる。

……なのだが、時々妙に若返る執事であつた。

「フィール様、他はともかく私に隠し事は感心しませんよ。個人的興味ではなく警備上問題があります。唯一の側近にあなたの行動パターンが読めないのでは、どうやって御身をお守りしると仰るのか？ 第一私は役に立つでしょう、ほら」

クリストフは窓際の机に視線を誘導した。剥き出しだった髪留めは早くも立派な贈り物顔をして置かれている。そう派手ではないラツピングだったので一安心だった。さすがに俺の好みを熟知している。

「……侍女にやる。言っておくが俺が用意した物じゃないぞ、渡しとくれと人から頼まれた」

「なんだ、侍女にですか。道理で地味な飾りだなと思いましたよ。ならグラスグリーン家の、我が家で療養させた例の女の子ですね」

早々に贈り先を察知した執事は味気なさそうな表情を一瞬で消し去り、企み深い笑みを浮かべた。

「情けない。そこまでお気に召されているなら強引に押しつけていけば宜しいじゃないですか。どうせフィール様は意地でも独身を貫かれるのでしょし、彼女一人くらい困つたつて何も不都合はありませんよ。でないと私たちも張り合いがないし」

最後の一言が本音なのだろう。そういえば負傷したフローネをや

や強引に預かった際も皆が浮かれていたことを思い出す。堅物の俺が女性を連れ込んだと内輪のニュースになり、「ようやく貴方も一人前」と出来の悪い息子の成長を喜ぶような感じ。

俺は黙考の時間を稼ぐためにワイングラスへ手を伸ばす。考え事をしていても舌は自動的にワインを賞味している。日常用の赤ワインは慣れた味わいだった。

強引に押していけば……。

クリストフの一言に、かなり魅了されている自分を知る。

エドという枷が消失しても俺が抑制を保ち、フローネと友人関係を、正確には恋人未満の関係を続けていけばよかったのだろう。何も発展はないが安寧はあった。でも、吊り橋を渡り始めた今となつては、引き返すことなど叶わない。目をつぶって駆け抜けるか、立ちすくみ続けるか、どちらかだ。

「しかし噂になりたくないんだ。俺はどうでもいいが彼女に迷惑がかかる」

「マルグリット様の侍女ですからねえ。確かに下手なこととはできませんが、なに、バレなければ平気です」

「……それに侯爵もいるし」

日中の侯爵との会話内容を全て語って聞かせた。髪留めを預かった経緯も忘れないで付け加える。クリストフはすっかり兄貴顔でソファを陣取り、オールバックの髪を撫でつけながら耳を傾けた。

屋外では未だ天気が回復しないようだ。音もなく仄かに、土に沁み込んでいく春雨はフローネの微笑みに似ている。と、そこまで考えた俺は、己の詩人としての才能の陳腐さに自嘲した。

詩といえは、来月には詩会が行われる。当然俺も一つ発表しなければならぬので、なにか準備をしておかなければいけなかった。

そんなことを考えつつ話し終えると、クリストフは「いわゆる気な女性に惚れたものですね」と面倒そうに呟いていたが、一つ大きく頷くと簡潔明瞭に。

「ともかく、ここはあれですよ、肝心の彼女をまずはさっさとモノにして下さい。所詮は侍女なんですから、後はどうにでもなるですよ。」

けろりと言い放ち、おやすみなさいと俺を寢室に追い立てた。

第8話

時は流れ、月は満ち欠けて5月、風薫る季節。詩会の日が来た。

初夏の風情の色濃い景勝地にたつ離宮にて、王侯貴族以外にも有名な吟遊詩人やたしなみのある文化人などを集合させての雅な催しである。

この国では古くから伝承してきた叙事詩に加え、ここ1000年ほどで急速に発展した抒情詩も人気があり、そういう背景の下に王族が主催する詩会とくれば重要な意味があるのが分かるだろう。

マルグリット王太子妃が古書を取り寄せて事前準備するのも無理はないのだ。

会場となる大広間は西側の壁がすべて取り払われ、庭続きになっており、小鳥のさえずりを乗せた清風がさわやかに吹き込んでくる。山からの湧水を引いた小川が庭を蛇行しながら涼を提供していて、どんな野暮くさい詩オンチであってもこの庭の風情を詠んでおけば及第点をあげましょう、と言わんばかりだ。

当日の俺は本職である記録取りに追われっ放しで、他人が披露していく渾身の一作もただの文字の羅列に置き換えていくばかり、風情も雅もなかった。自分の番でない限り出席者は自由に会場を出入りして、雑談したり庭を散策したり控室で休んだりと思いいいに過ごせるのに、俺は隅の一角に雪隠詰めだ。

ようやく休憩時間になりペンを放り出したところで艶麗な人影が差した。黒髪に黒い双眸が煌めくマルグリット妃殿下であることに気づくや否や、俺は片膝をついて恭順の姿勢をとった。妃殿下は王

族の一員として詩会の序盤に登場し、国の発展を祝う詩を発表し終えていた。

「わたくしの詩はどう聞こえますか？」

自分の美しさをよく知っている微笑み方で、彼女は俺を見下ろす。

詩は良かった。古典的な文法に則って荘重な響きを持たせた、王族に相応しい詩だった。そう感想を述べるとご満悦そうに、

「あら嬉しい賛辞ね。あの本で古代詩を勉強したので成果を試してみたかったのよ。若葉よ薫風よと季節を愛でるだけなら誰にでもきるわ、そう思わない？」

美辞麗句で飾り立てた、吹けば飛ぶような軽い内容のものを、妃殿下は容赦なく軽蔑した。詩を不得手とする貴族だつて中には居るのだ。彼らが頭をひねり倒して必死に詠んだ初夏の歌でも、こうも簡単に蹴り捨てるのが、マルグリット妃殿下という人である。

内心嘆息をしつつ、ちらりと周囲に視線を走らせた。でも侍女たちは控室にでも待機させられているのか、お付きの人影はなかった。

「じゃ、休憩後は花形貴公子の詩才の一端を見せてもらいましょう。楽しみにしているわ」

高慢さをアクセサリのように纏った妃殿下は俺に圧力を掛け忘れることなく、去って行った。遠巻きに眺めていた人々が面白そうに笑いさざめく。

しかし別に聴衆の期待に応える必要はないのだ。

俺が用意していたのは平凡でいて風変わりな句だ。

もうすぐ

生まれてくる命が待ち遠しいよ、母親の胎内でもうしばらく元気にしているんだよ、という主旨の。

俺の番になると妙に満員になった会場へ、何の説明もなく披露した直後は女性陣から悲鳴が上がった。

「フィール様、隠し子!？」

「誰、母親って誰?許せない!」

もはや取り繕った仮面をかなぐり捨てて大混乱の聴衆を、俺は落ちついて制した。口元に笑みさえ浮かべて。

「……もちろん私じゃありません。兄夫婦に宿っている子のことですよ」

してやったり。会場中が静まりかえった、あの間抜けな数秒は傑作であった。

詩会の閉幕後、俺は顔見知りの各貴族たちから相当な反響をもらった。度肝を抜かれたという苦笑からシヨックのあまり失神したという苦情まで、まあ好評とは程遠い感じだ。

翌晩に開かれた立食形式のパーティーでも波紋は残っていたようだが、なぜかマルグリット妃殿下だけは

「なかなか感心したわ……素晴らしいインパクト。これはぜひ歴史に残すべき詩会よ。貴方が記録係なんじゃ、自分の詩について記述が残せないじゃないの。誰か他の人にやらせなさいよ」

とまで感銘を受けた様子だった。ともあれ注目の的になってしまい、ちよっとやり過ぎたかなと俺も反省した。

何しろパーティーの後は秘密裏に成し遂げなくてはならない一大事が控えている。

クリストフがいなければ俺はフローネに会うことも不可能だろう。俺は割り当てられた離宮の一室で、優秀な補佐係に連れられた彼女を待っているだけでよかった。

執事の体躯に隠されるようにして現れたフローネは可愛かった。髪型がいつもと違ってアップスタイルになっており、白い首筋が露わになっている。それだけでワインを一瓶は空けられそんな気の高ぶりを俺にもたらした。

「万全でございます。ではお休みなさいませ、よい夜を」
クリストフは爽やかに言って戸を閉めた。

まずは離宮の室内を興味深そうに眺めているフローネを目で追っていると、なんとも妙な気分になってきた。

クリストフの「彼女をモノにしろ」という無責任な唆しが御神託のように甦るくらいだから重症である。何か気を紛らわせる方法はないものか……ワインでも飲むか……いやアルコールは逆効果だろうか、と俺は落ち着きなく詩会のメモを片づけていた。

「若子爵様、とっても素敵な詩でしたね！」

突然フローネが俺に笑いかけてきた。

「……詩？」

俺はポカンと呆けた。

「兄弟夫婦の子って仰っていたでしょう！わたし、療養中はそのご夫妻に本当によくして頂いたわ。お子様が生まれるなんて知りませんでした！素敵ですね！」

うむ、と俺は咳払いなどして、頭を切り替えようと努力してみる。

「詩の内容もだけど、若子爵様があの場であれを発表したっていう事も、感動的でしたねえ。お兄様、きつとお喜びになるでしょうね」

壁際に立っていたフローネは優しく涙ぐんでいた。失明の悲劇に遭い、無念にも社交界から退いた兄を知っているからだ。

俺とは対照的に王都の華やきが似合う人物だった。子爵家の跡取りとして皆からも認められていたのに、病に罹ったばかりに……。いつしか人々は兄を忘れ、代理に過ぎない俺を持てはやす。

だから俺はあの詩を詠んだのだ。兄の存在を世に埋もれさせないために、あれほどのインパクトを付けて。

そういう、あの詩の本当の価値を理解してくれているのは、たぶん彼女だけだろう。

「礼を言うよ」

「え、何が？」

血の気が降りた俺は柔らかい絨毯を踏んでフローネの傍に行き、右手を取って甲に口づけた。最大限の敬意をこめて。

第8話（後書き）

注：叙事詩……神話・伝説・英雄の功業などを物語る韻文

抒情詩……作者の思いや感情を表す詩

だそうです。（大辞林より）

詩に関してはど素人ですので、いろいろ間違っていたらすみません。

第9話

リボンの掛けられた小箱を差し出された娘は、喜ぶと思いきや顔を強張らせた。

「受け取れません」

照れや恥じらいではない別の顔つきで、頑として拒否する理由が俺には分からない。するとフローネはしごく真面目に説明してくれる。

「わたしたち侍女なんかが、身分ある方から主人に内密でプレゼントを頂いたりしたら、どう見られると思います？……賄賂ですよ」

権力者に便宜を図ってもらおうと、まずお付きの者を買収する。

古今東西、不変の図式である。

即座に誤解は解いておき、母親由来の品と知った彼女は驚きながら箱を開けてくれたが、まさかこんなふう拒絶されるとは思ってもおらず、俺はこの時不意に、俺たちの間を隔てる境界線を意識させられることになった。

「お母さんの髪留め……」

遺品が見つかったから、という老侍女の言葉を俺は忘れていない。確か、彼女の母もグラスグリーン侯爵家の侍女だったと聞いたが、それ以上の詳細は知らない。でも、今は亡き母の思い出に浸るべき神聖な時間だろう、と俺は遠慮して、邪魔をしないよう窓に目を転じた。

ガラス窓の端にヤモリのような虫の影がくっついていて。さすがは離宮、自然の宝庫というべきか。

今宵は確か新月だったなと思いつながら何気なくフロアーネに視線をやり、俺はそこで違和感を覚えた。

泣くでもなく、悲しむでもなく、懐かしげですらない。フロアーネは遺品を扱いあぐね首を傾げている。俺の視線にすぐ気づき、何を言っかと思えば、

「届けて下さってありがとうございます。でもこんな光物の飾りは、侍女には華美過ぎて使えなさそうです。わたしには必要ありません」
「……そういう言い方はないんじゃないか？飾らなくてもお前が持っているだけでお前の母は喜ぶだろう」

「そうでしょうか？それにしても、母も侍女だったのに、どうしてこんな髪留めを持っていたんでしょう……。意外と派手な人だったのかな？」

まるで見知らぬ他人を想像するような口調であっけらかんと肩をすくめている。

「母はわたしが5歳になる前に亡くなったのであまり記憶がないんですよ。その後養母が大切にわたしを育ててくれたので、そっちのほうが大きなき存在なんですよね。……どうしようかな、これ」

敬遠するかのように箱に戻そうとするので、対面からテーブル越しに腕をつかむ。

「じゃあ俺の前にいる時だけ、付けたらどうだ。きつとお前によく似合う」

単に見たいだけなのだが。

そこで彼女はベッドルームにある鏡を覗きこみながら、結いあげた髪に上手く飾りをはめた。紫苑色のありふれた侍女服に紺色の髪飾りなんて、彼女が思っているような華美さなど微塵もなく、シンブルでさり気ない。けれどいい品物である。俺が金を出したわけでもないのに、イメージ通りの清楚さに俺は勝手に満足した。

俺たちは窓辺に椅子を移動させ、ゆつくりとした時間を星見に費やす。闇夜のため砂粒のような星までもが遮られることなく輝いている。天の川も水量が増して見える。

外の庭園ではあらゆる隙間に男女が潜り込んで既に恋語りに興じているだろう。

「詩会のお話を聞かせて下さいよ」

フローネがワインを注いでくれた。有名な産地のスパークリング・ワインが舌の上で弾ける。

詩の批評なら昨日から貴人の間で嫌というほど話していたが、素人の娘を前にするとまた違った趣になる。俺は詩に優劣を決めるのは好きじゃない。ただ何十と発表された中から心に残った詩を思い出すままに教え、

「あ、その詩はちらつと聞きました、マルグリット様にお飲物をお持ちしたとき。そういう出だしだったんですね」

などと嬉しそうに相槌を打ってもらうのは心地よかった。

やがて夜が最奥まで深まり、夜行性の鳥も鳴きやむ頃、いつものようにフローネは起きていられずウトウトし始めた。どうしても徹夜ができない体質なのだそうだ。

初夏とはいえ山川に臨む離宮は気温が低く、続き間のベッドルームから毛布を一つ取ってソファに丸まっている体へ掛けたが、その

頭に髪留めを付けたままであることに気づく。寝返りを打つと痛そうだ。

なぜ俺が侍女の世話を焼かなければならんだ……？

大体年ごろの娘ともあるう者が、男の前でこんなに無防備に安らいでいいのだろうか。素行の悪い男なら舌舐めずりして襲いかかる場面だろうに。

信用されている証拠なのかもしれないが、あまり有り難くない。

腕を潜り込ませてそつと頭を抱え、髪留めを抜くと同時に

「あ……？」

と戸惑った可憐な声が腕の中から漏れた。今さら目を見開いて俺を押しつけようとしている。

手遅れなんだよ、全く……。

「どうした、構わないぞ眠っていて。どうせ男に襲われる心配なぞしていないんだろ」

低い声で近くの耳に挑発の息を吹きこむ。

難なく抵抗を抑え込んでいるうちに、だんだん本当に煽られてくる。

そもそも今夜は初めから気が高ぶっていた。欲望の下火がくすぶっているところへ、無邪気な隙を見せておいて、俺にどうしろと言うのだ。

生憎と俺は聖人でもなければ紳士ですらない。自他ともに認める女嫌いではあっても、好ましく思っている女性を抱きたいと思う素

直な本能は、人並みにある。
彼女はそれを知らなさ過ぎだ。

「何ならベッドに連れて行ってやるのか？お前は目を閉じてていい……」

彼女が息をのめばのむほど俺のスイッチが押されていき、ますます追いつめて行きたくなる。

けれど、追いつめ方を間違っではいけない。

一言「抵抗するな」と本気で脅迫すれば、彼女にとってそれは絶対命令になってしまふ。身分を理由にして俺の要求に従う義務を感じるだろう。それだけは犯してはならない、という信念を見失わないうちは俺もまだ理性が活きているようだ。

「ごめんなさい……、寝ないから手を放して」

フローネは乱れた髪をソファの座面に散らかして、怖々と俺の肩を押し返した。すっかり眠気も失せたらしい。あとひと押ししたい衝動を覚えながらも、俺は身を起こす。

気まずい雰囲気だった。

娘は混乱と警戒心とその他諸々の感情を入り混じらせて硬直している。俺が黙っていても何も事態は動きそうにないので、仕方なく娘に助け舟を出してやる。もっとも突き落としたのも俺だけだ。

「寝るなどは言っていない。ただ……俺の忍耐を試すような真似はやめてくれ。寝るなら帰ってくれないか」

「忍耐……って……」

純真さは時に罪だ、と思いつながら廊下に通じる扉へ向かう。勝手が分からない離宮であることと、今の時間帯なら二人で歩いていて

も暗闇に紛れることから、彼女を部屋まで送るためだ。

「怒ったんですか？ごめんなさい。怒らないで……」

か細い声が迷子のように響く。俺は回しかけたドアノブを元に戻し、後ろを振り返った。

「忍耐の意味が、ちゃんと分かっているんだろうな？」

「え……ええと、まあ……」

「ならばそれなりの覚悟をしておけよ」

言い捨てるだけ。彼女がどんな受け止め方をしたのかなんて気を遣うことはしない。

足音も極力立てないよう気をつけながら廊下を先導し、目的地に着くと声もなく別れた。

第10話

詩会で集まった王侯貴族がその後しばらく社交の場を離宮に留める中、俺は一人慌ただしく王都に戻り、すぐに異国へ出発した。わが国の西隣にあるその国から詩人としての俺へ招待状が届き、国王陛下の勅命により文化交流に務める予定になっていたからだ。

二週間とすこし長めの期間中、毎日いろいろな会席が設けられ、視察と称して観光も堪能し、刺激的な訪問になったのだが、特に驚くべき出来事があった。

とある商人が主催した昼食会でのこと。昼食会といえども大層な規模で、ディナーパーティー並みに大勢の招待客を抱えており、本来人嫌いの俺をうんざりさせていた。

人。人。人。あんまり人を見過ぎたせいか、人間というより奇妙な生物の群れに飲みこまれているような錯覚がし始める。

しかしその中に、どこかで見たことのある気がする顔があった。40代くらいであろうその貴婦人も俺を意識しているようだ。

誰かに照会しようにも、群衆のおかげで婦人をすぐに見失ってしまった。

諦めて帰り際、ようやく挨拶を切り上げて人心地つける馬車に乗り息をついたところで、コンコンとノックの音がする。

「お疲れのところを恐れ入ります」

頭から薄いシヨールを羽織って顔を隠した貴婦人は、先ほど気になっっていたその人である。俺はすぐ馬車を降りた。

「レノワ子爵家の御子息とか……かつてあの国で暮らしておりました私の耳に懐かしくて、普段こういった席には出ないのですが、今日は思いきって参加したのです。あの国の話も気になりました」

人目を気にするように一度周囲を窺ってから、婦人はシヨールを取った。濃く白粉をはたいて作られた美しい顔が露わになる。至近距離で確認するとやはり記憶にある顔だが、今しがたも津波のように人を紹介されまくったばかりで脳みそはパンク状態、古い情報など探索できない。

「申し訳ありませんが、貴女は……？」

「ここでは差し障りがございます」

薄墨色を基調にした上品なシヨールを肩にかけ直し、婦人の視線はちらりと馬車へ。

「……いいでしょう、どうぞ」

御者にしばらく待つよう合図してから中に乗り込む。もしクリストフがこの場にいたら、なんて無防備な、と眉をつり上げただろうが、俺も全くの無警戒というわけじゃなかった。幼少の頃に叩き込まれた護身術はいつでも発揮の用意ができています。

向かい合って腰を落ち着けると、狭い車内にミステリアスな香料が広がった。

「今でも恐ろしい噂になっているのでしょうか……私はアーフォル

グ伯爵家の家内だった者でございます。今は夫と離婚致しまして娘のポーラとこの国にある実家に身を寄せているのですが」

「アーフォルグ伯爵の？」

ということとは？例の放火事件の犯人・ポーラ姫の母親なのか？

寝耳に水とはこのこと。事後、彼ら一家の行方なんて知らなかった。

上質の織物をすらりと身にまとう姿は、沈鬱な表情はあれど気品があつて洗練されている。

婦人が俺に質問してきたのは、国の様子や、離婚した伯爵のその後についてだった。だが前者はともかく、後者は俺も答えを持ち合わせていない。

そういえばフローネからも同じ質問を受けたことを思い出した。伯爵がどうしているか知りたいと。対価は先払いさせながら、すっかり忘れていたのだ。さすがに良心の呵責が俺の不実を咎めた。

伯爵の情報がなにも得られないと分かると、婦人は無表情に瞳を伏せる。

「そうですね……ただ夫は、いえ伯爵はあの国のどこかに隠遁していると思うのです。もし………いえ………」

何度も口を開けては閉じ、色を失うほどきつく指を握りしめ、沈黙が長引けば長引くほど婦人は蒼白になっていった。

見かねて俺は口をはさんだ。俺としては婦人を励ますつもりで、「何か伝言があれば承りますが……？」と。

しかし逆に婦人は弾かれたように首を振り、
「私たちのことがもう風化しているのなら、今さら余計なことは致しません。このまま忘れてしまうのが誰にとっても幸せなこと。あなたが何の情報もお持ちではなくて、よかったです。伝言など……何もありませんわ」

そう言って再び人目を忍びながら去っていった。

霧のように儂げな後ろ姿は、見送る者の同情を買つかもしれないでも。

次の予定へ向けて動き出した馬車の中、貴婦人の残香を吸いながら、俺は割り切れない感情に囚われて混乱した。見慣れない異国の風土、揺れる車内、ただよう香り。すべてが渦を巻いて神経を攪乱させ、この思いがけない出来事をどう処理していいのか俺を惑わす。

確かに放火事件はもう人々の意識から消えている。

このまま埃を積もらせ、永遠に闇に葬ることに誰も異議はないだろう。俺もそれでいいと思っていた。

けれど、フローネの額に火傷の痕は残りつづける。醜く変質してしまった皮膚を前髪で隠して、彼女は伯爵の行方を心配している。

忘れてしまうほうが幸せだなんて、あの婦人が口にすべき言葉じゃない。

そう、俺は、あの事件で負傷した侍女について婦人がついに何の

言及もしなかったことが許せなかった。謝罪とまでは言わなくても、「巻き込んでしまった娘さんは良くなったのでしょうか?」と、そんな一言さえあつたなら。

個人的な義憤に駆られてその夜はなかなか寝つけなかった。

やっと微睡したと思ったら夢にフローネが出てきて、ふくれっ面で

「何をおっしゃってるんですか。あなただつて頼み事をすっぱかしていらしたくせに」

と痛恨の一撃をかましてきた。

「お前だつてこの前はべつに催促してこなかっただろ」

幻影に向かつて一人で虚しく弁解を繰り返したことを、翌朝目覚めた時もしっかりと覚えていた俺は、ともかく帰国したらアーフォールグ伯爵の情報を調べようと決意した。

ただ、そう簡単な仕事ではないはずだった。我がレノワ一族とは付き合いがなかったし、迂闊に聞きこむわけにもいかない。上官の手によって記された記録はどこかに保管されていると思うが、俺の目の届く範囲にないことは確実である。俺は帰国の途でも糸口に悩んでいた。

加えて、王都に戻ると滞っていた仕事が山を成して俺を待っていて、私用に割く時間がとれない。

唯一手がかりに近づけそうだったのは、帰国直後に済ませた国王陛下への報告のときだ。陛下ならさすがにアーフォールグ伯爵の現状くらいご存じだろう。一介の文官に国王陛下と話すチャンスは滅多に巡ってこない。

しかし。

「何か土産物はないのか」
と言ったのは国王ではなく脇にいた数名の側近のうちの一人だった。いわゆる重臣として国の中枢を掌握している彼らの中にグラスグリーン侯爵も含まれている。

俺はゆっくりとした動作で荷物から一冊のスケッチブックを取り出す。別にお偉方のために描いたものではなく、趣味の範囲で、異国の風景を写したものだ。絵はまだ素描段階だが雰囲気くらいは伝わる。

「ほう、詩ばかりでなく絵も嗜むのか。万能だな」

国王陛下がふむふむと頷きながらスケッチをめぐり、よく描く時間があったなと感心する。昼間は予定が詰まっていたので、ほとんどは寝る前に軽く筆を走らせたと答えると、

「若き才人は芸術が恋人か」

「ご婦人が泣いているぞ」

側近がまた茶々を入れた。笑いに唱和しながらグラスグリーン侯爵が俺を見物している。この鬱陶しい側近連中を前にして暗黙の禁忌に触れるとどんな面倒なことになるだろう。俺は諦めて退出した。

気がつけば詩会から一月、二月と時間が経過していく。その間、俺はフローネに会う顔がなかった。

次までに覚悟しておけと脅迫まがいの言葉を吐いて別れたのだ。怯えた彼女が二度と俺の前に現れない可能性もなくはない。伯爵の情報があれば、それを餌にというわけではないけれども、彼女を呼び出しやすくなると期待していたのだが。そう都合よく物事は進んでくれない。

だからといってあの行動を後悔しているわけではないのだ。おっとりした彼女のペースに合わせていたらいつまで経っても先に進めないこと請け合いである。彼女も俺の強引さは分かっているはずだ。

分かっているはず……と信じているが一片の後ろめたさがなんとも……。

しかしこうなったら仕方ない。舞踏会が近づいてきたある日、俺は腹をくくってクリストフを呼んだ。

第11話

「いいかミミル、誰かに素性を聞かれてもフィールー様の名前は絶対に出すんじゃないぞ。秘密の任務だからな」

王宮にある俺の部屋にて、クリストフはすっかり父親のような顔つきで小柄な少年に言い聞かせた。

行儀見習いのため我がレノワ家に奉公に来ているミミルには、これまで屋敷の雑用をさせるだけで王宮へ連れてきたことがなかった。したがって人生初の王宮入りを果たしたミミルは興奮の絶頂にあり、バラ色の頬は見る者を微笑ませる可愛さだが、クリストフはそれどころではなかった。呆れるほど何度も手順を確認させている。

「お使い先を間違えるんじゃないよ。さっき庭園で遠目に見たのを覚えているな？」

「なるべく一人でいる時をねらって、お名前を確かめて、手紙をお渡しするんですよ。フィールー様のお名前は出さない。大丈夫だよ」

案外ミミルはテキパキと復唱した。

少年をお使いに差し向けることについて、クリストフは「子どもですが大丈夫でしょうか」と難色を示していたが、かえって子どもだからこそ上手くいくものもある。フローネを呼び出すことに関して若干の負い目がある今回、使者の人選としてミミルほど適任な者はいない。

「頼んだぞミミル、もう行け」

永遠に続きそうな二人の様子にしびれを切らした俺は強引に声を

かけ、ミミルを王宮初仕事へ送り出した。それから側近のほうをジロリと見やる。

「お前も尾行してきていいぞ。ここに居られても鬱陶しいからな」
嫌味のつもりだったのだが、

「一時間経つても戻ってこなかったら探しに行きます」
大真面目な答えが返って来たのだった。

まあ確かにフローネを探し当てて、人目につかないように手紙を渡してもらうのだから少年には難易度の高い課題である。初めての宮殿で迷子になるかもしれないし、衛兵や好奇心旺盛な女官の目に留まって誰何されるかもしれないし、フローネとうまく接触できないかもしれないし、失敗する要素は満載だ。

だが大人の心配をよそに、40分後のミミルの表情は澁刺としていた。報告を聞いたら、フローネが優しくお礼を言った上、褒美にお菓子を与えたいらしい。とってもいいお姉さんだった、とミミルは大満足していた。

次の舞踏会の日、とのみ書いたメッセージをフローネは一応受け取ってくれたらしいが、どのような反応を示したのかははっきりしない。

だから当日の舞踏会終了後、フローネを迎えにミミルを向かわせて部屋で待っている間中落ち着かなかった。前回の乱暴な発言はきつと尾を引いているはずだ。

ああ見えてフローネは気弱一辺倒というわけでもなく、時に芯の通ったところを見せて驚かせる部分があるのだ。あのマルグリット妃殿下の侍女を続けていたり、人を助けに火事場に飛びこんだりする

るのがその証拠である。

今度こそ俺に牙を剥くのではないか……と思っているとドアがようやく内向きに開き、今日もご機嫌なミミルに続いてフローネが顔をのぞかせた。

扉の手前で立ち止まり様子を伺う彼女と視線が合う。

「……」

また気づまりな空気が醸成されようとするのを察して俺は先手を打った。ミミルをそのまま部屋に置いておいたのだ。子どもが好きそうなお菓子や軽食の類もテーブルに準備していたのが功を奏し、ミミルは大喜びで

「お姉さんこっち座ろうよ」

とフローネの手を引く。ぷっくりとした少年の頬に浮かぶえくぼが母性本能をくすぐったか、彼女も思わず微笑む。

俺の作戦は見事に成功した。屈託のないミミルの無邪気さが大いに場を救い、まるでエドが居た時のような談笑ができた。フローネの肩の力を抜くには十分なほどに。

しかし時が深夜をまわると、さすがにミミルは居眠りし始める。隣のベッドへ運び、規則正しい寝息を聞きながら俺とフローネは向かい合った。

「……あの、エドの住所を御存じでしょうか。手紙を出したかったんですけど知らなくて」

「住所か。そうだな、俺も知らないが使いの者に持たせて探させれ

ばいい」

とりあえずそんなところから話を交わす。

一般人が利用できる郵便制度は一応あるものの十分に整備されているわけではない。特に田舎ではいい加減らしくて、頻繁に郵便物が行方不明になると聞いている。だから信頼できる人間に、個人的に頼むほうが賢明だ。

「若子爵様の家の方に？それじゃ申し訳ないですよ」

「馬を飛ばせば2、3日つてとこだろつ。そう大した使いじゃないさ」

「……ありがとうございます」

ようやくフローネは俺に和やかな笑顔を浮かべてくれた。

どこからか、かすかに足音が聞こえる。厚い壁と扉のおかげで防音機能は高い建物だが、螺旋階段はよく響くのだ。

尖塔の上のほうにあるこの部屋まで滅多に人は来ない。塔の頂点にあるのが上官の部屋、その下が俺や同僚の部屋、さらに下が資料室となっている。足音は途中の階で途切れたようであった。

居心地のいい位置であるが、難点は熱気が籠ることだろう。夏は大変過ごしにくい。今も夜とはいえ7月、フローネも着ていたカーディガンを脱いでいる。だが窓を開け放つと涼しい風が入ってきた。

「わあ、気もちいい風」

彼女は立ち上がり、俺が佇む窓辺へ並んだ。気流に乗って強い風が吹きこんでくるのを黙って受ける。

なぜ今日は呼んでくれたんですか？」と。

隣で声がぼつりと聞こえたのはどのくらい後だったろうか。

「あれからずっと連絡がなかったの……もう、愛想を尽かされたのかな、とか……色々考えてしまいました」

左右に分けて結んでいる彼女の髪が大きくはためき、たちまち乱れた。

詩会から二カ月間音沙汰がなかったのを、彼女なりに気にしていたらしい。

その間に起こった、伯爵の元夫人との一件は黙っておくと決めている。彼女を喜ばせる情報を掴むまでは、一切俺から伯爵に関する話題に触れないで忘れた振りをしておく。フローネにサプライズを送ってやるという、もはや意地である。

「お前こそ俺に愛想を尽かしたんじゃないのか。少し酷なことをした。悪かったよ」

「い、いえ……」

後悔はしていないが反省はある。真摯な謝意を伝えようと俺は体ごと彼女に正面向けたのに、その彼女は眼を外に泳がせている。目を合わせたくないと言われているような気がした。彼女の気持ちを読めないまま、これ以上どうしたらいいのかわからなくなり、今夜は我慢するつもりだった酒にやつぱり手を出した。

第12話

前回渡した母の髪留めは仕舞いこまれているのだろうか。フロネはいつも通り二つ結びの簡素な髪型をしていて、王宮で伺候する花形侍女には程遠い、控えめな印象である。

フロネの言い方だと、今後も俺と会うのは吝かちかでないのかもしれない。しかしこのぎこちない態度から察するに、結局のところ俺の忍耐へ問題回帰するだけらしい。前回から何も解決していないことになる。

それでもまあ、完全に避けられてしまうよりはマシなのか、と虚しい吐息をつきながら火酒を呷り、ふと横へ目を走らせる。

途端、娘が赤くなって目をそらす姿が仄暗い燭台の灯りにあぶり出された。

「俺を見ていたのか？」

不愉快な内省の余韻で俺の声はすこし硬かった。

「や、あの、……ごめんなさいジロジロ見るつもりはなかったんだけど、その、綺麗だったからつい……」

「綺麗？」

きれい。キレイ。……何が？俺？

予測していなかった衝撃的な返答で呆気にとられてしまう。男に向かつて何事だ、とは一瞬思ったが、それより早く娘があわてて言い募る。

「だってそうなんですから！動く美術品みたいで、誰だって綺麗だ
と思っただけ見惚れちゃいますよ。今日の舞踏会だって凄かったじゃな
いですか！一人ダンスが終わると10人くらい殺到しちゃって、そ
れも皆お美しい姫君ばかりで、つまり、あなたがそれだけ女性を魅
了する方だっという証明ですよ。なのになんで、ここに自分が居る
のか謎なんです。なんだかもすごく場違いで、あなたがすごく遠
い人に見えて」

前ぶれもなく、洪水のように溢れる突発的な言葉の数々。こんな
に彼女が夢中になって喋ることがあるだろうか。しかし次第にその
表情には影が落ちていった。

「だって可笑しいじゃないですか？世の中にはもつと若子爵様に相
応しい女性がいらつしやるでしょう？美人で性格が良くて身分のあ
る方と、どうしてお付き合いしないんですか。どうして舞踏会の夜
に、わたしなんですか。……こんな疑い出したら終わりがないか
ら、考えないようにして来たんです。でも、でも、もう考えずには
いられないんです」

俺だけでなく室内の全ての物が固唾をのんで圧倒されているよう
な、張りつめた空気。あまりに唐突な感情の爆発。

でもずっと心の奥底に抑えていた本音だったのだろう……。

俺には剥き出しのそれを包み込んでやる準備がまるで出来ていな
かった。彼女が結局何を望んでいるのかも分かりはしなかった。迷
いながら一步近づくと途端に魔法が解けたのかフローネは口をつぐ
む。

その体はすぐ傍にある。しかし手を伸ばして頭を抱き寄せることを許さない、鉄壁のオーラがあるようだ。ゆっくりと……脳内で荒れている滓を沈殿させるようにゆっくりと息を吐き、俺はもう一度娘と向き合った。

今、彼女の瞳は逃げることなく俺へ焦点をあてている。薄暗い世界で星のように光って。涙を堪えているのだろうと思った。

「……一つ聞きたいんだが」

「……」

「今のは俺を拒んでいる言葉なのか？」

それを聞くと、普段の内気さはどこへやら、噛みつくように睨んできた。

「いつそんなことを言いました？わたしはただ……ただ……分不相応にもあなたをお慕いしているから」

瞳に浮かぶ星が瞬いたかと思うや、頬に向かって涙がすべっていく。

やっぱり牙を剥かれたか、と俺は思いながら透明な軌跡を目でなぞる。

「でもあなたとわたしじゃどう考えても相応しくない、そうでしょう？だから……」

「相応しくない。という理由で結局俺を拒んでいるように聞こえるんだが」

俺が冷静に問い返すと果たしてフローネは瞼を伏せた。少し興奮が冷めてきたようだ。

「……触れてもいいか」

今まで許可を求めたことなんか無かったのに。

儂い涙をぬぐってやり静かに体を抱き寄せる間、強風も遠慮したように勢いを殺いだ。棚の中段に置かれた時計はほっと緊張を解いたように元気よく音を刻み始める。いつともなく互いに顔を添わせ、唇が重なるうとした瞬間、

「……お菓子ないのお？」

場違いに呑気な声が響いて俺たちの度肝をぬいた。

ミミルの声だ。忘れていた、そういえばベッドに寝せていたんだ。まさか起きていたのかと焦ったが、それきりベッドルームからは寝息のみが平和に響く。どうやら寝言だったらしい。

とはいえ子どもの前でもものすごく情動的な場面を演じたわけで、正気に戻った俺もフローネも何とも言いようがなく、照れて照れてたいへん見つともない間を味わう羽目になった。
なぜこんなことになったんだ？

それにしても成り行きとはいえ、不器用な俺と彼女がせっかくここまでムードを築いたというのに指の先からすり抜けていったのが惜しい。しかしミミルを置いておいたのは俺のせいなのだから、やっぱり何とも言えないのだった。

「お前も眠くなる頃だろう、部屋まで送るぞ」
気持ちを切り替えて声をかける。

フローネは一拍ほど間を置き、次は？と聞いてきた。その声が不安そうに揺れていた。ので、俺は少し首を傾げ、無造作に答える。
「お前の来たい時でいい。いつがいい？」

「明日……」
間髪入れず。

「あ、明日？」
「はい」

「明日の晩は東の国使節団と晩餐会の予定があるんだ。食後も色々付き合いが長引くだろうし、いくら俺でも異国の使者相手に途中で抜けるような無礼はできないぞ。相当遅い時間までかかるかも」

人嫌いとはいえども最低限の仕事は割り切っている。するとフローネは「そうですか、分かりました」と頷いた。あっさりと。

従順？いや、違う。

むしろ離反。ここで手を離したら最後、二度と自分の元に戻らなくなるような、そんな感じの退き方のように思われて俺は息をのむ。

「……来るなどは言ってない。遅くなってもいいなら来いよ」

見えない糸に引っ張られたように喉から言葉が出ていた。

フローネは黙って俺を見た。

第13話

沈んでいた体が浮力に任せて水面に押し上げられるように睡眠から覚めたとき、まず視界に入ったのは見慣れた天井だった。俺の質素な屋敷とは比べ物にならない、美しい彩色が施された、王宮で仮眠を取った時に見るいつもの豪華な模様だ。

高窓から白み始めた空がのぞく。寝台に差しこむ日光はまだ弱く、生まれたばかりのようだ。それで大体の時間が分かった。

そして俺はおもむろに、左側へ視線を転じる。そこにブラウンオリープの髪束と透き通るような肌色とが、ちゃんと寝台に重みを乗せて横たわっている。夢ではないらしい。

昨晚用事が済んだ後、時刻はもう12時を過ぎていて、俺は半信半疑で塔に戻った。期待するのは愚かだと己に言い聞かせながら。しかし待っているよう伝えておいた資料室の、明るい月下の窓辺に娘はいた。

部屋に入っても大した言葉は交わさなかったし、ランプを灯しもしなかった。闇の中、誘われるように俺の肩へ預けられた娘の頭の重み。母譲りの髪留めを外すと解放されたように流れ落ちた艶髪。苦しそうな呼吸。しなやかにのけ反る背中……。

回想するだけで、またあれを味わいたいという勝手な願望が湧いてくる。

実際のところ夜を過ごしてからの方が彼女への執着心が強まった。それも日を追うごとに狂おしく増していく。

クリストフはそんな俺を少々呆れ気味に観察し、まだまだ修行が足りないとも言いたげに剣術の鍛錬をさせて俺に渴を入れた。俺がミミルを鍛えることもあった。ミミルはあと数年したら騎士の養成学校へ入学させる予定になっているので、今から基礎的な体力づくりをしても早すぎることはない。

「フィール様も同じ学校へ行かれたんですね？どんな風なんですか？」

「おや……お前にそのことは話したか？」

「クリストフ様にお聞きしました。フィール様も昔は騎士を目指していたって」

「そうだったかな」

とぼけてみせるが、それは本当のことだ。

貴族の二男として、騎士兵にでもなつて身を立てるという規定通りの未来が俺を待っていたはずだった。

「あ、郵便が来たみたいです。フィール様、すぐ戻って参ります」
門に現れた人影に目敏く気がついたミミルは毬のように弾みながら郵便物を受け取りに行く。

初夏の日差しが芝生を勢いよく育てる青い庭をひとわり見回し、屋敷の庇の陰へ戻った。鍛錬の邪魔になるからという理由で花壇もオブジェも庭の一角に追いやられ、大部分のスペースを殺風景な芝生に譲り渡している。いかにも男主人の屋敷という感じの無愛想さだった。ここにあの娘を住ませたら、一体どんなふう到庭が変貌するだろうなどと俺は夢想した。

ミミルが戻ってきた。一通の書簡を手に、内海地方から早馬で届いたものだと報告してくる。内海地方とはレノワ子爵家の領地であ

る。では使者を差し向けたのは父か、それとも。

「兄上……」

この場で封を千切りたいほどだったが自重して屋内に上がる。クリストフの注目を惹きつつ、飛ぶように書状を斜め読みし、

「男だったらしいぞ。一昨日だ」

「レグルド様からですか？ では無事に誕生されたのですね。おめでとうございます。フィールー様の甥ですね！」

昔から仕えてくれている使用人たちも話を聞きつけて口々に祝った。早速仕事を調整して田舎の内海地方へ駆けつける算段をつけ、翌朝出発することにした。

翌日はまだ空も目覚めない未明から馬に鞍をくくり留め、武一人を警護に、全力で疾走する。岩石に打ちつける波飛沫のように、空気の塊が真っ向から俺にぶつかっては碎けて散っていく。

兄レグルドが失明したのは18の頃だったか。

優秀な跡取りとして社交界でも名を知られていた彼が、突然すべてを奪われて失意の隠居を余儀なくされるのを、俺は傍らで見ている。拒絶の甲斐もなく、兄から取り上げられたものが今度は俺に与えられた。運命を呪ったのは兄だけではなく、俺もだった。

馬車なら丸2日は要する距離を無理やり強行した結果、夜半になって目的地に到着。既に寝静まっている時間だったので夜警に話をする以外は口をつぐみ、朝になるまで適当に睡眠を取ろうと思いつつ、館に上がった。

だが俺の到着を予想していたのかレグルドはすぐに起きてきた。

「遠いところをわざわざありがとう。フィールーなら駆けつけてくれると思っていたよ」

一見したところ普段とさほど変化ない温和な笑顔だ。

レグルドは瞼を固く閉ざしたまま手慣れた様子でランプを灯し、俺はその間にワインを探し当て、夜更けに兄弟二人で祝杯を上げた。

「……よかつたな」

「そうだね」

一度何もかも失った彼が、新しい幸福を手に入れたことに、長々と述べたい祝いの言葉だが俺の舌はうまく回ってはいくれないのだ。レグルドは不出来な弟を深遠な笑みで迎えてくれるのだが。どちらも多弁ではないので沈黙の方が長い。もしくはワインの感想をポツリと言いつつだけ。

まだ男の子の名前は決めていないらしい。

三杯目を注ぐ時、レグルドが俺を見た。厳密には見たというのは変な表現かもしれないが、彼に顔を向けられると全てを見通す光線でも当てられているような気がして、やはり見られていると思うのであった。

「フィールーもいつか家族を持ってごらん。もちろん独身主義は承知している、理由も分かっているよ。でも心から大切だと思える家族を作ってほしいな、お前にも」

「ああ。心配しなくていい」

俺の答え方を聞いてレグルドが不思議そうに首を傾げた。しかし

聡明な彼のこと、直ちに笑顔に戻る。

「そういう人がいるんだね？良かったよ……。母上には教えないの？まだ結婚する気がなさそうだって、僕にしょっちゅう愚痴を言いに来られるんだよ」

両親は内海地方の中心地にある領館に住んでいた。レグルドの住むこの古館からは少し離れている。

母親にフローネの存在は知らぬが仏だろう。

「そうか、それでフィールーの相手が分かったよ。療養に来たあの女の子だね。尚更良かった、あのお嬢さんはいい子だからね」

フローネはこの館で療養したのだ。王都で仕事に忙殺されていた俺の代わりに、フローネの面倒をレグルドに任せただった。浮世から一步身を引いている彼は、身分差など大して問題にせず対等に彼女と接してくれたようだし、また俺たちの仲を静かに肯定してくれた。

「……なあ兄上」

「なんだい」

「約束を覚えているか？」

レグルドの瞼はピクリとも反応せず、探るように俺を見据えている。無意識に詰まる胸を開放したくて俺は更にワインを口へ流し込んだ。やっぱり俺はこの兄には敵わないと痛感しながら。

透視にも似たレグルドの沈黙がようやく和らぐ。

「……お前が跡取りを承知した時の『契約』なら覚えているとも。

一つ、フィルーの妻帯については誰も口を出さないこと。二つ、僕に子どもが生まれたらお前の養子にして、いずれ爵位を継ぐよう育てること。そうだったね」

本来は兄が継ぐべき地位だったのだから、いずれ彼の子孫に返すのが当然だ。ややこしい内輪もめの種を撒かないように、俺は子孫を残すべきでない。十代だった俺がそのように思い決め、以来ずっと独身主義だと言い続けてきたのを、レグルドはよく理解している。

「それをこのタイミングで持ち出すということは、フィルー、あのお嬢さんを一生日陰に置いておくという意味なんだね？」

レグルドはいつでも冷静沈着だが、しかし彼が怒っているのは明白だった。

その怒りはフローネのためのものだ。彼女の存在を世間に知らしめることなくただ自分の都合を押しつけようとしている無慈悲な俺へ対して。そして俺はレグルドの非難を有り難いと思っている。

「……俺も迷ってはいるんだ、兄上。例えばあいつに綺麗なドレスを着せて舞踏会にエスコートする夢を見ないわけじゃない。でも、そうすると途方もない重圧があいつに掛かり、必ず傷をつける。俺がそれに耐えられないんだ」

「……そう」

一つゆっくりと頷くと、レグルドはもう何も言わなかった。

第13話（後書き）

この二人ははじめから両思いなんで、さらっと越えてもらいました。でも物語はまだもう少し続きます！よかったら最後までお付き合ってくださいね！

第14話(前書き)

……今さらこっそり更新してみるとか。

第14話

アーフォオルグ伯爵の行方を追う。この作業に打つ手は限られていた。

クリストフは奔走したらしい。かつてアーフォオルグ伯爵と関係を持っていた人物を数人ほど発見してくれた。

一人はこの国で手広く事業を興している商人。アーフォオルグ家が進出していた運送業を、例の事件後に引き継いだという。

それなら事業の件などで今も伯爵と連絡を取れる人物だろうと期待していたが、返事は空振りである。

「連絡なんて取りやしませんぜ。あんな事件を身内が引き起こしたお人ですよ。ウチにしたって関わりがあっちゃ商売に差し支えますからな」

いかにもやり手の商人といった風情の男は、妙に首を突っ込まない方が身のためだと俺にやんわりと注意し、如才なく話をそらした。

二人目は事件前までアーフォオルグ家に仕えていたという元侍女。会いに行つて直接話を聞いたところでは、伯爵ではなく奥方付きだったとのこと。つまり西の国に暮らす例の婦人のことである。

「伯爵様の居所なんて分かりません。私たち使用人を全員解雇なさつて、お屋敷も捨てられましたもの。奥方様とも離婚のうえ実家に帰れと……お勞しや、奥方様！はつきり申しあげて御夫婦仲はあまり良ろしくはなかつたんです」

元侍女は俺の顔を食い入るように見ながら、いささか調子良すぎるほどに内情を暴露した。しまいには「これ以上のお話が聞きたければ、今夜お部屋で」というような事を言い出したので俺は速やか

に退散し、帰るなりクリストフを捕まえ

「貞操の危機だったぞ」

とあらましを伝えると、男二人で笑い合った。

同じような調子で捗々しい結果が得られないので、ならばと資料室を当たってみる。

元夫人によれば国内に居住しているとか。伯爵家の領地は処罰として事件後

に召し上げられたはずだが、国王陛下の勅令で一部に特赦があったという噂も当時流れた。となると、没収を免れた土地に隠れ住んでいる可能性は高い。

しかしそれはどこなのか？

資料室には土地台帳が置いてある。所有者が変わったりすれば、必ず記録係が書きこむ決まりになっている。

なのに、修正の跡がない。よく調べてみると放置されているのは伯爵領に関してのみで、他の土地はちゃんと二重線が引いてあったり、新しい所有者名が記されてあったりする。

正確な資料が見つからないのは土地台帳だけではなかった。誰も閲覧可能な資料室に置いてある記録では、放火事件の全貌を知るのに全く役に立たなかった。

まあ、予想できたことなので「やっぱりな」と思う程度だったが、しかしよく考えてみると不思議である。なぜここまで徹底的に隠ぺいする必要があるのでろう。

何しろ浅はかな事件だったのだ。単にベルナル王子の妃に選ばれなかつた姫君が嫉妬に駆られただけのこと。

浅薄すぎて諸外国に示しがつかないので無かつたものとしたい気持ちは分かるが、歴史から痕跡を抹消しなければならぬほど深刻というわけでもない。むしろ、後世の人々が聞いたところで

「馬鹿な事件もあつたもんだ」

とサロンで笑われたり、もっと年月が経てば芝居やオペラの格好の題材にされたりするのがオチの、娯楽性のある事件である。

提供元のアーフォルグ家にとってはこれ以上ない恥辱だろうけど……まるで誰かがそれに同情して、「そつとしておいてやれ」と庇つたかのような印象である。

少し休憩にするか、と資料だらけの窮屈な執務部屋を出て伸びをする。

夏真つ盛りの陽光は絶好調。螺旋階段の窓から外をひよいと覗くと目の前を色彩鮮やかな蝶が風に流されるように飛んで行った。

階段を下りて廊下の突き当たりから中庭へ。書庫へ行く時によく使う出口だ。そうだ、書庫へでも行くか。

半地下の入口へ下りて行く階段の横の小部屋に書庫番の爺さんが腰を曲げて座っている。軽く手を挙げて挨拶を済ませたつもりが、爺さんは急に立ち上がる。

「いつお出でかと待ちくたびれましたぞ！」

「は？」

埃にまみれた老人顔に今日は満面のお愛想が載っている。率直に

言って品がなく、不気味だ。これはロクな用件ではないぞ、と眉をひそめる俺にお構いなく、爺さんは薄い包みを突き出す。

「預かりましたんでね。へへ……ようござんすねえ、旦那くらい男前だと娘の一人や二人はお手の物ってわけで」

爺さんを無視して俺は包みを引ったくる。ざっと見たところ差出人の名前はない。してみるとフローネなのだろう。俺に懸想している女なら必ず身元を明記するからだ。

以前も一度、フローネは爺さんにメモを託した。王宮の隅で閑職に甘んじている書庫番であれば、多少疑われても問題ないと判断しているらしい。

俺は内ポケットから小瓶を取り出した。通常より1/4の容量であるクウォーター・ボトルワインだが名産地もので価値があり、爺さんの目を輝かせるには十分だ。

「分かっているだろうな？これを預けに来た人のことは」

「見ざる聞かざる言わざるで。承知しておりますとも。へっへっへ」

無人の書庫で包みの中身を確認すると、彼女の一笔と、エド宛の手紙が封をされて入っていた。

エドへの手紙をどう預けしていいか考えた末、書庫の方にお頼みしました。大丈夫だったらいいのですが。それと次回ですが夜番になりましたので行けなくなりました。お許し下さいませ。

いかにもフローネらしい、丁寧にしたためられた筆づかいだ。

……だが、この無情な中身は何だ。

姫君でも町娘でもない、彼女は仕事を担っている女性なのだから、当番が回って来たのなら仕方ないことだ。でも理屈は理屈として、俺は心のどこかで、フローネは体を許したことを後悔しているのではないか、もう俺に会いたくないとでも思っているのではないかと、つまらない疑惑に苛まれていた。

エドへの手紙はすぐに手配した。エドのことなので、読むだけ読んで返事はうっちゃらかすのではないかと思い、返信を受け取るまで帰ってくるなと使者には命じておいた。

クリストフはフローネの一筆箋を読んで俺の不機嫌の理由を知り、可笑しそうに笑っている。

「案外賢い娘ですねえ……。フィール様を振り回せる女性はこの娘くらいでしょうかね。大したものですよ」

どうやら彼の中でフローネの株が上がったらしい。

第15話

暦は秋へ移った。

文化行事が目白押し季節。王侯貴族はそれぞれ乗馬や狩りや室内楽に興じ、また王宮でも晩餐会や舞踏会が開かれて何かと忙しくなる。

秋の音楽会もその一つだ。宮廷音楽家によるオーケストラは外国のそれと遜色ないほど近年レベルが上がって来ていて、今年は有名な指揮者をわざわざ招聘している力入れよう。ただ残念だったのは怪しい天候のせいで野外会場が取りやめになり、いつもの大広間になったことくらいだろうか。

「すばらしい演奏でしたわね。すっかり酔ってしまいましたわ」

終演後、一人の若い令嬢が光り輝くスマイルを放ちながら俺に歩み寄ってくる、たちまち周辺の女性陣が各自の会話を切り上げて輪に加わってきて、

「本当ですわ。なんだかこのまま帰宅なんてつまらない」

「私、チェロが弾けますの。アンサンブルなさいませんか？」

「素敵ですわ。私はヴァイオリンを。フィール様、ぜひ一緒に余韻に浸りましょうよ」

年頃の令嬢たちがら人ばかり団結し、優雅に、しかし逃がすものかという気迫で俺を包囲した。いずれも舞踏会では必ずダンスを申し込みに来る面々で、お馴染みといえはお馴染みの関係である。

断るのに迷う余地はなかったが、一度くらいでめげる彼女らでは

ない。良くも悪くも慣れているのだ。この後ご予定でもあるんですかと食いつかれ、ないなら構わないでしょうと強引に腕を絡められる。

「大丈夫ですよ、フィールー様の女嫌いは承知しておりますから、どなたか殿方にも声をかけますわ。そうね……サイデン子爵？」

偶然傍を通りかかった男を無作為に選び、すばやくメンバーを調達してきた。華麗な令嬢一団からアンサンブルに誘われた男たちも大いに乗り気で、俺は外堀を埋められた格好になる。

だが、今宵こそはフローネに会うのだ。あれから何度か機会を見繕ってミミルをお使いにやったのだが、タイミングが悪かったのか、それとも意図があつたのか、とにかく都合がつかないという理由で密会は延期になっていた。さんざん気を揉むうちに日差しが衰え秋になり、今夜の音楽会後を提案すると、今度は辞退されなかった。

だから並々ならぬ意志をもって俺はアンサンブルを断つたのだが、淑女の仮面をかぶつた5人娘も執拗である。個別に話せばここまで強情を張る人たちではないのに、今は集団の力学が働いているらしい。

時間はどんどん過ぎていく。本格的に不穏な気分になってくる。

途方に暮れながらあの娘が待っているかもしれないのに。

「物騒な目をしておられますね、ご同輩」

すつと横に移動してきたサイデン子爵が俺の顔を覗きこんで、声を忍ばせた。俺よりも年上だが同じ記録係を務めている男である。

「抜けていいですよ。堪忍袋の緒が切れてムードをぶち壊しにされるのも嫌ですしね。なあに、後のことはご心配なく、適当にフオロ―しておきますから。では皆さん、楽器をお屋敷から取り寄せるお時間が必要でしょうから30分後、始めることにしましょう」

サイデン子爵の大声に賛同して一旦解散するメンバーに混じり、俺は広間を出て注意深く北東の塔へ戻った。

誰も待つていない部屋は無機質の暗闇だった。

一度訪ねてきて諦めて帰ったのか、それともこれから来るところなのか。微妙な時間帯である。

今日はクリストフもミミルも屋敷に帰らせてある。フロ―ネが今どこで何をしているのか……探しに行けるのは俺しかいないが、行き違いになる可能性もある。己を落ち着かせ、もう少し待つてみることにしたが、部屋の明かりをつけ忘れるほど俺は焦燥に駆られていた。

しばらくすると廊下にガヤガヤと人の群れる音がして、そんなことは滅多にないことなので驚いて耳を澄ますと、どうやらアンサンブルの連中がサイデン子爵の部屋に集合したらしいと分かった。記録係の同僚なので部屋は隣なのだ。賑やかな話し声の次に楽器の音色が響き始め、俺はますます落ち着かなくなる。

ええい、出よう。

一階まで下りて外に出ると、規則正しく植えられている木々によって狭められた夜空に、今宵は厚い雲をかわして月が楚々と浮かんでいた。しかし雲は明らかに水分を含んでいて重たげだった。もう

間もなく雨になるだろう。

俺の胸中は既に土砂降りに見舞われているけれど。

宮殿に戻りひと回りしたが雨の予感のためかあまり人は残っておらず、催し後にしては閑散としていた。もちろんフローネと遭遇するような奇跡も起こらない。彼女の部屋は知っているが、朋輩たちとの共同寝室になっているので手も足も出ない。

これはいよいよ……一度思い出ができれば十分だろうと天から囁かれているかのようだ。

それとも、フローネの拒絶の意志が天に通じたのか。

取り返しのつかない失敗を犯したような気がして悄然と塔に引き上げる途中、アンサンブル集団が出ていくのを見つけて陰でやり過ぎず。

やがて天空の気配が不穏になり、板のような屈強な雲に月光が攫われたかと思うとにわか雨が木の葉を叩く。たちまち世界は雨一色になった。

第16話

長い螺旋階段を上がる元気もなく、塔の入口に留まっていた。そうしていると、次々に想念が脳裏をよぎっていく。

『どうしてわたしなんですか』 『もう考えずにはいられないんです』
結ばれる前夜、大人しくて従順で臆病な娘はいつになく感情を高くぶらせ、たぶん勇気をかき集めて俺と対峙した。

でも、思えば俺は彼女の不安を溶かしてやれたのだろうか？

覚悟を決めたような顔をして翌日俺に身を任せはしたものの、彼女が心から喜んでいたのかどうか、その疑問に俺は推測さえできなかった。

少しずつ彼女の存在が俺から遠ざかるような錯覚。

分かっている。根源は、彼女の心に寄り添っていない俺にあるのだ。でもこれまで人を避けてきた俺には、気になる女の子への想いやり方なんて難題中の難題に思える。

逆に言えば今まで俺にそんな問題を突きつけなかったからこそ、フローネは俺の鋼鉄なる防御壁を素通りして特別な近さに来たのだけれど……。

思惟に耽っていた俺の耳がふと、バシャバシャと水を撥ねる音を捉えた。

足首まであるスカートをたくし上げて走ってきた娘は体当たりの勢いで飛びこんできて、慌てて避けた俺にその瞬間気がついたらし

く、短い悲鳴を上げたが、それは幸い自然の騒音にかき消された。フローネだった。

「わ、若子爵様ですか？……すみません！こ、こんな所にいらっしやっただんですか」

照明のない暗がりでお互いに凝視したのも束の間。とにかく濡れた彼女を連れて急いで部屋に上がり、棚からタオルを数枚見つけ出す。

簡単に水分をぬぐって処理を済ませてから、ようやくほっと脱力した。

「今日は悪かったな……」

「そんな、こちらこそ。おまけにこんな格好では迷惑でしょう？」

ソファに座るよう促しても、服が湿っているからと言って固辞する。怒りや不満の色合いはなかったが、態度は硬質だった。

「ソファが嫌なら、こっちに座れ」

「あ……」

腕を引っぱり、よろめいたその軽量な体を膝の上に乗せてしまうと、水気を含んだ娘の髪をしげしげと見た。ほのかなランプの光に浮かび上がる、滝のように美しく流れている髪の毛はあえかな光沢を放ち、妖艶な曲線の軌跡を描いている。

あまり望ましくない方向へ傾く自分に気がつき、俺は咳払いをした。

「忘れないうちにエドからの返事を渡しておこう」

この一言は、居心地悪そうに身を緊張させていたフローネの関心

をあっさり攫った。

「まあ！読んでもいいですか？今！」

「ああ」

相変わらずエド効果は甚大なようだ。フローネはもう莞爾とした笑顔になって、いそいそとランプににじり寄り手紙を広げる。

予想通りエドは筆を取るのが億劫だったらしく、返事はフローネ宛だけしかなかった。使者が口頭で承ったという「ま、元気でね」が俺への唯一のメッセージだった。

だから俺を哀れに思ったのか、フローネは自分宛の手紙を部分的に音読し、エドが元気で過ごしていることを教えようと心を砕く。

「ええと…… 時間が許せばいつでも遊びに来てね。新物のワインが待つてるよ、ってフィールーに言っといて” だそうです。そうか、若子爵様はワインが好きですもんね。醸造地巡りと称してエドに会いに行けますね…… いいなあ」

マルグリット妃殿下は決して慈悲のない人物ではない。

ないのだが、己の使用人に対しては大変厳しい扱いをしている。その一つに挙げられるのが侍女に与える休暇の少なさ。

ふて腐れた、とまでは言わないが不満げに目を細めて俺を羨むフローネ自身、休暇を取ってエドに会いに行く発想は微塵もない。

しかし気がつけば場はほぐれていた。素直に不愉快さを表すということは、それだけ俺へ心を許している証拠。フローネはまたしばらく黙って手紙を読んだが、さらに口元をほころばせた。

「去年の音楽会のことを書いてありますよ。“ フィルーと合奏したのがいい思い出”ですって」

「ああ、あれか……」

それは音楽会終演後、3人で集まった時のこと。いつもは単独で勝手に演奏してくれるエドだが、今宵の令嬢たちと同じように音楽に酔ったのか、俺との合奏を主張して譲らなかつたのだ。貴族なら教養の一環として楽器の扱いも習うもので、俺の場合は横笛だが、実のところあまり得手ではなかつた。

「エドも若子爵様も、本当に素敵な音色でしたよ……。あれ一度きり、聴かせて下さいませんか？」

「俺は子ども騙しのレベルなんだぞ。人に聴かせられるものじゃない」

「でも今日、なさつたんでしょう？」

彼女は含みのある笑みでそう言った。広間でアンサンブルに盛り上がっていた令嬢たちの声を聞いていたらしい。

俺が目を向けると、彼女も俺の反応を伺っている。

「……その隅の飾棚があるだろう。どこかの引き出しに笛が入っていると思う。探して出してくれ」

浮気現場を取り押さえられた間抜けな男じゃあるまいし、「してません」なんて陳腐な否定は馬鹿みたいだ。忘れ去られたように奥の奥に仕舞いこまれた笛の姿のほうに、雄弁に事実を物語るだろう。

そして一年ぶりに発掘された笛を手に取り、試しに息を吹き込んでみた。まあ、なんとか音は出る。

不思議そうに眼を瞬く、数々の不安を胸に秘めながら俺を見つめ

ている娘へ、今できるのはこのくらい。

「貴重な二度目を聴かせてやろう。耳の肥えた貴族相手じゃわざわざ恥を晒すだけだが、お前程度ならまだいい」

結局こんな言い回しになってしまふ。古今東西、詩人たちはこういう場面で情緒たっぷりに演出するものなのに、俺は全く何をやっているんだか。

しかし横笛の効能は偉大だった。

音が掠れようが震えようが娘心はくすぐられたらしい。うっとりとした瞳で拍手をくれたし、その後そっと抱き寄せると素直に頼りきってくれた。

よかった。心が離れたわけじゃなかったと分かって、ひとまずほっとした。

「……そういえばアーフォルク伯爵の件だが」

それを聞くとフローネは若干浮かんでいた眠気を吹き飛ばし、機敏に振り返った。覚えていて下さったんですか？と声も弾んでいる。満面の期待感に肩身が狭くなりながら、ここは正直に告げておく。「まだ分からないんだ。調べているんだが手がかりが少なくて」
手は尽くしたのだという弁解を聞いた彼女が、首をかしげた。そして事もなげにこう言った。

「侯爵様もご存じなかったんですか」

「侯爵様？どの侯爵様だ」

「グラスグリーン侯爵様ですよ。伯爵様とはご友人同士でいらっし

やるから、きつと居場所も把握しておられると思っていたのですが」

この時の俺の驚愕が分かってもらえるだろうか。なぜあの彼女がこれほど強力なヒントが出てくるんだ？今ごろになって！

言葉もなく彼女を見下ろす俺はさぞかし滑稽な顔をしていたことだろう。

「グラスグリーン侯爵はお前の女主人の父親じゃないか。自分で尋ねれば済む話だったんじゃないのか？」

「そ、そうですね、侍女ごときが侯爵様にそんな質問はできません。貴族であるあなたが調べて下さったほうが早いだろうと思っただけ……」

信じられない。俺もクリストフも一体何のために……。意気消沈した俺をさらに叩きのめすように窓が雨に悲鳴を上げている。

だが吐息をついた瞬間、唐突な閃きが俺の頭をかすめた。彼女の使った「侍女ごとき」について天啓とも思える閃きが。

グラスグリーン侯爵は俺をわざわざ呼び出して、火遊びはならないとご丁寧にも釘を刺したのだ。「侍女ごとき」にそこまでするか？

つまりあの人にとってフローネは「ごとき」ではないのだ。

だが問題は、侯爵がさほど情にあつくなく使用人など眼中にない、独裁者タイプの人物であるということ。

辻褃を合わせるにはこう考えるしかない。侯爵にとってフローネは例外、特例、特別なのだ。

……何だって？どういう意味だ？俺は自分の出した結論に戸惑い、

それ以上先を考え進めるのを躊躇った。

一方のフローネは俺の機嫌を損ねたと思っただらしい。あとは自分で侯爵様に尋ねてみると言い、

「ご迷惑をおかけしました……」

きちんと頭を下げてくる。どんなに深い仲になっても、彼女は領分をわきまえていた。

「……グラスグリーン侯爵とアーフォルグ伯爵は険悪な関係じゃなかったか？王太子の花嫁争奪戦の時、とても友人同士には見えなかったが」

「険悪だったのは姫君同士ですよ。マルグリット様もポーラ姫も気が強くていらっしやるから。でもお父君同士はお若い時から親交があつたそうですよ」

聞けば聞くほどフローネのほう事情に明るいことが分かり、やれやれとため息をついた。

第17話

北の国境を兼ねている山脈のふもとに広がる北山地方は、静かな農村が点在した落ち着いた佇まいだが、辺鄙すぎる点と、目の保養にすべき景勝もない点が災いし、貴族にも観光客にも愛想を尽かされている土地柄だった。

エドに会うためでなければ俺だってわざわざ足を運ばない。

行ってみて宿が見当たらないのに驚いた。仮にも近辺のぶどう農園を取り仕切る地主が住み、ささやかながら市場も立つ町のはずなのに、外部の人間の訪れを期待してはいないようだ。

地元の人に尋ねてようやく宿屋を発見。町で唯一の宿屋だそうだが、染みのついた壁に走るひび割れ。腰かけると悲鳴を上げるベッド。ガタガタと揺れる机。

ここまですると経済状態の悪さを示す田舎ぶりが新鮮で面白くなってきた。俺は貴族階級の人間であることに何の優越も抱いてこなかったつもりだけど、やはり裕福な環境なのだと自覚する。

ともあれいつそ徹底的に楽しむことにした。宿帳には偽名で記入し、従者はすべて帰らせた。たまには身分のしがらみから脱して自由を満喫しよう。小姑のように煩わしいクリストフも王都に留守番とくれば、俺の気まぐれを咎める者もなく、今年の秋のバカンスは風変わりなものになりそうだ。

宮廷音楽家を退職したエドは、音楽で人を養わせるほど裕福でも文化的でもないこの土地で、町の地主の下僕をこなしながら演奏や作曲の依頼を回してもらい、生計を立てているらしい。

早速会いに行き、半年前より痩せた顔を見たが、男同士の再会なんて平淡なものだ。王都から遠路はるばる来訪した親友と久しぶりの握手をするなり、「仕事が終わるのは深夜になるかな。それまで待ってて」と通告して、エドは消えた。

自由な男なのだ。規範や常識に囚われないからこそ俺とも対等に接してくる。俺とエドが仲良くなったのは、世間からあぶれた変人ぶりのおかげかもしれない。

夜半になってようやく膝をつき合わせ、お目当てである新物のワインを開封する。ワイングラスもないので深みのある椀を使って豪快に飲むと、若くて荒々しい味覚が口腔を満たす。暴れん坊のやんちゃな男の子みたいな味だ。時間をかけて熟成するにつれ、角が取れて丸みを帯びてくる、その変化がたまらない。

「ねえ、フローネは元気にしているの？」

互いの近況を述べ合うなかで、当然出るべき質問が出た。

「またあの子のこと苛めてないだろうね。君ってほんと天の邪鬼だからな。……昔から全然変わってないよね」

「……ほっといってくれ」

エドはくすくす笑い、俺が土産として持ってきた王都のチーズをつまみ、その口当たりの良さを懐かしんだ。

最初からエドは俺とフローネの縁結び役だった。ある日ひょっこり彼女を連れてきて、僕の新しい友達だよと紹介してきた。初日は俺も彼女も互いに警戒するばかりで、なぜ今さら若い女の子を仲間に加えようとするのか俺は理解できなかったが、エドは飄々として、

「だって僕の音楽を聞いてもらいたいんだから」と主張するだけ。芸術家である彼はつねにマイペースであった。

「傍で見てて楽しかったけどね。君ったら分かりやすいちよっかい出してたし、フローネは真に受けちゃうし」

あれは知りあってすぐのこと。

酒を仰ぎつつ会話をしつつ、三人でまったりと一夜を明かした最初の日。フローネは俺の身分に緊張して縮こまっていたが、そのくせ途中で眠りこけ、徹夜した俺に惜しげもなく寝顔を披露した。

で、よせばいいものを俺が翌朝それをからかった。

あの娘は律義に羞恥し、俺を「意地悪な人」と認識し、しばらくは嫌厭ムードが続いた。

当時はそれを楽しむ余裕があったのに。

今、あの頃のように本気で疎まれたりしたら、自分がどれだけ焦燥するかは分かっていた。雨の音楽会の日、それを思い知らされたから。

何かを察したように、エドは空になったお椀をもてあそびながら笑顔の後退させた。

「それにしても……心配だなあ。僕がいなくて、君たちはうまくやれてるの？ただでさえ身分って障害があるのに、君は女の子の気持ちを細やかに汲むのが下手だからな」

「じゃあ聞くが、エドは彼女の気持ちとやらが分かるのか」

エドの偉そうな物言いにすこし苛立ちが起きる。

いつだってエドはフローネのよき理解者だ。

俺がエドに嫉妬するとしたら、彼女と以心伝心の間柄にあるとい

う、その一点だ。

「そりゃ他人だもの、気持ち完璧に分かるなんて言わないさ。だ
けどあの子の立場を想像してごらんよ。複雑だよ」

「また身分の話か？そんなものは関係ない」
「ほらみる。何にも分かってないな」

容赦なく鼻に皺を寄せられるが、俺はぐつと我慢して友人の有り
難い説教のつづきを待った。

「いい？君たちが両想いの関係になったのは友人として祝福するけ
ど、世間は黙ってないよ。隠していてもいつかは露見する。その時
君は社交界の評判を落とすくらいで済むとしても、後ろ盾のない彼
女はどうなるの？国内中の姫君から恨みを買うんだよ」

同じことをグラスグリーン侯爵も前々から危惧していた。

女の嫉妬に火がついたら……まさに火をつけてみせたポーラ姫の
事件が脳裏をよぎる。

「フローネの命綱はフィールーだけなんだよ」

「それは、分かっている」

「頭ではね。けど行動が伴っていないでしょ。分かっているんだっ
たら、どうしてあの子をいつまでも宮廷に置いとくのさ。あんな危
ない場所から連れ出そうとは思わないの？あるいはせめて、優しい
言葉の一つもかけてさ、もっとあの子の不安を和らげてやるべきじ
やないの？」

「それは……」

「不器用だとかなんとか言い訳して、愛情表現も中途半端なんでし
よ。社交界きつての花形貴公子のくせに、まったく君は……」

俺が最も嫌う称号を、わざわざ使ってくる。

「幸いなことにフローネは君がそういう男だつてのを理解しているから、何も言わない。信じて身を任せるわけだな。でも一方で、いつ命綱に見捨てられてもいいように覚悟しているんだ。彼女のそんな気持ち君に分かる？」

我こそは正義の味方だというような顔をして、エドは存分に俺を断罪する。

しかしこの言動がフローネへのあつい友情のみに因るものかといえはそうでもない。エドは自他ともに認めるひねくれ者だ。フローネをダシにして俺を責め立て、ひとり悦に入るという構図は、昔も今も変わっていない。

だというのに、エドの言葉は、天から真つ逆さまに俺の頭上へ直撃する。

なんで、と俺は口中で虚しく呟く。

なんで彼女を見捨てようなどと？

何年もかけてここまで来た。放火事件という衝撃もあつて初期のぎくしゃくムードを乗り越え、互いを大事に思い合い、穏やかでしなやかな信頼を築いてきた。

その積み重ねがあるのに、今さら彼女を見捨てようという気になるわけがない。

なのに彼女は俺を疑っているというのか？

エドは淡々とした口調を守り、

「誤解しないでよ。彼女は君を信じてる。信じろつて僕が手紙に書いたんだから。それでも不安を消すわけにはいかない立場にいるんだ、彼女は。誰も守ってくれる人なんかいないから、自分で防衛し

てなきや 駄目なんだ。だけど、そうしてでも、あの子は君のことが
好きらしいよ……そう手紙に書いてあった」

良かったね。

そう締めくくりながら、エドの微笑みは俺を突き放していた。

第18話

「さあこれで売り切りだよ、残りひと籠！残りひと籠！」

「いい綿が手に入ったわねえ、これでどうにか冬支度ができるわ」

「ちえっ。はるばる峠を越えて来たつてのにこんな値かよ……」

方々の農村から集まったらしい人々が混沌と入り乱れ、市場は猥雑な活気を帯びている。

風変わりなバカンスの5日目。この町がこんなに賑わっている光景は初めて見た。

エドによると、月に何度か、こうして大規模な市場がたつのだと言っ。

大規模といってももちろん王都のそれとは比べるべくもないが、程よい賑わいと落ち着きが俺にとっては心地よく、すこし心が開放的になり、

「兄さんいい男だねえ。どう、何か見て行かない？安くしとくよ」と露天商から掛けられる呼び声や、その後続く会話も案外と楽しめた。

「宿屋に泊ってるの？なら夜になったら酒場に顔出しなよ」

市場の隅で酒瓶を売っていた女が、代金を受け取りながら俺に笑いかける。

「市場の日だけ臨時で酒場を開くのよ。宿屋の食事よりはましな物を出すからさ」

「そうか」

はつきり言って宿の食事はひどい味だったから、俺は即座にうなずいた。

北山地方名物の強風にたまりかね、太陽は早々と西へ退き、夕方になった。ただでさえ癖の強い俺の髪はすっかり乱されている。宿に戻り、くしゃくしゃな毛束に手櫛を入れつつ、ちらりとカウンターの目をやった。珍しく人影があったからだ。

「そんな名前の人は泊まつちやいないよ。他を聞いておくれな」
「宿屋はここだけと聞いていますけど」

若い女の声に俺の足が止まる。

煩わしそうな女将の対応にも、辛抱強くねばっているその後ろ姿。髪の色といい背格好といい、見覚えがある。しかしまさか、こんな所では会うはずもない。と思ったとき、娘の髪留めが夕日に反射した。

「ほんとうに宿帳に載っていませんか？ フィルー・レノワという方です」

娘が誰なのかを確信してもなお、俺はそれを信じなかった。名前を呼ぶこともできず、駆け寄ることもできず。やがて女将が邪険そうに娘をにらみ、悄然とした彼女が足を半歩引き、あきらめて出ようと振り向く映像が、やけにゆっくりと俺の視界を流れた。

「れっきとしたお休みをもらったんです」

夢幻ではない証拠を示そうというかのように、部屋に入ると開口一番、フローネは事情を説明した。まだ俺は疑いの表情を消せないでいる。

「マルグリット様は外遊のご予定で、わたしもお供するはずだったんですが、それがなくなってます」

「なくなつた？」

すると彼女は無意識に眉をしかめ、「ちょっと、あの、ご不興を買って……」と口ごもった。気難しいマルグリット妃殿下の機嫌を損ね、しばらく顔を見たくないという理由で休暇を出されたものらしい。

「れっきとしたお休み、ねえ」

「よくある話です！ いいじゃないですか、こうして偶然にお休みを過ごせるんですから。それともお邪魔でしたか？」

フローネは落ち込む代わりに唇をとがらせ、彼女自身にとつても不本意な休暇を正当化しようと、やや強引に説明を打ち切った。

近頃、こういう拗ねた表情をよく見せる気がする。俺は妙にそれが嬉しかった。

窓から日光はもう差し込まず、かといって明るい照明もない室内はいっそう古びて見える。フローネは立ちあがり、埃を払うべくマントを肩から滑り落とすところだ。下にはシンプルながら上品な藤色のワンピースドレス。

「……」

豪華絢爛な王宮において彼女は埋没しているが、こんな田舎に置いてみたら分かる。いかに瑞々しく洗練された娘であることが。

自らは発光しないが、光を当てられると美しく浮かび上がる月のよう。

そして改めて、王侯貴族の世界から分断されているこの辺境で二人きりなのを、夢だと思つた。

外に出ると市場の撤収作業が手早く行われていて、徐々に隙間が目立っていく空間に風が吹きさらし、人々を家路へと追い立てる。荷車を引いた彼らは、今日の売り上げについて、今年の秋の実りについて、来るべき冬の準備について、喜怒哀楽を織り交ぜながら話し合い、別れていく。

彼らにとってここは現実。

そんなことを考えながら、小さな居酒屋のドアを押し開け、狭いテーブルに娘と向かい合う。

「ええと、あの、ああ注文をするんですよね」

「そうだな。で、何を？」

と大真面目にメニューを吟味する自分たちが急に可笑しくなり、最初に俺が吹きだすと、つられて彼女も笑い転げた。

「ああ、落ち着かない。わたしたち、何をやっているんでしょう？」

「クリストフがいたら大目玉を食らうな」

王都で留守番中の執事は、フローネをこの地まで送るよう馬車を手配した功労者らしいが、まさか俺たちがこういう過ごし方をしているとは想像もしていないだろう。

フローネはふと周囲を見回した。

「こんなに堂々と一緒にいていいんでしょうか……？ 誰にも見られてませんか？」

「平気さ。俺たちの存在なんか誰も興味ない。ここの人にとっては酒一杯の値段のほづが気になるだろうよ」

「そうかなあ」

フロアーネが意味ありげに微笑した時、女が勝手に近くの椅子を引いて俺たちのテーブルにつき、色っぽく足を組んだ。

「いらつしゃい、来てくれて嬉しいわ。だけど兄さん、昼間はこんな可愛い彼女連れてなかったじゃない。ちよつとがっかりよ……」

見れば露天商の女だ。

ホラねと言いたげにフロアーネが俺へ目配せすると、自分は食事に集中し出した。大つぴらに俺への好意を示す女に、特に機嫌を損ねたふうも見せず、淡々と会話を聞き流している。

慣れたことだ、と言わんばかりに。

けれどほかの客をあしらいに席を立った女は、最後になつこりと笑い、

「兄さん、今度の市では可愛い彼女に贈り物でも買ってあげなよ。

……それからあんたも、せっかくいい男を掴まえてるんだから、しっかり強請りなさい」

とフロアーネにウィンクした。フロアーネは面食らい、数度瞬きを繰り返した。

宿の部屋に帰り着くころには、移動の疲労やら飲み慣れない酒やらでフロアーネの意識は飛びかかっていた。ベッドに勢いよく身を投げ出して、しばらくギイギイと軋ませた後、ぽつりと呟く。

「変な感じ。……誰からも咎められないなんて」

第18話（後書き）

「ご都合主義的展開なのは認めますが、

「よくある話です！ いいじゃないですか！（開き直り）（開き直り）」

第19話

強い風は夜更けになっても衰えを知らず、木の枝を揺るだけでは飽き足らないのか、石壁の建物にぶつかっては唸り声を上げていた。

この風は北山地方の名物とも言われるが、静まりかえった夜更けに旅先の寝台で聞くものとしては、甚だ落ち着かない気分させられる。

どうにかして隙を見つけて家に侵入しようとする魔物のイメージすら湧いてきて、それはそれで詩情のある不気味さだと思いつながらこの5日間を過ごしてきた。

が、今晚は違う。

「……んん……」

寝返りをうつ余裕もないほど狭いベッドで、フローネは窮屈そうに身じろぎした後、再びすやすやと眠りの世界に戻った。外のおどろおどろしい暴風と、ざらざらとした粗悪なシーツの肌ざわりによって、俺は宿泊初日にかなり睡眠を害されたのだが、フローネにその様子は皆無である。

いや、呆れるのはそれだけではない。王都から遠路はるばる俺を追ってきたくせにキスの一つもねだることなく、どうして肝心なところで健やかに熟睡するのか。こっちの身にもなれと言いたい。

恨みがましい視線を向けてみても、相手はゆるんだ唇から規則正しい寝息を立てるばかり。

脈打つ心音。深い呼吸音。

昨晚まで人の生氣に乏しかった部屋に、今は温かく沁み入る音。一定のリズムを保ったそれらは、浜辺を濡らす波のように、寄せては返し、満ちては欠け、生命の息吹をひらすら刻む。

仮に外に魔物がいたとしても、この安らぎの音色には敵わないだろう。……と言うと、まるで母親の存在をたしかめて安心する幼子のようにだけ。

だけど、心地いい。いつも内気で頼りなくて守ってあげなければならぬはずの彼女に、逆に守られていると思った瞬間だった。

「お酒ばかり……」

エドとの再会を果たし、すこし感激が落ちついたらしいフローネは、エドの住まいを一瞥して呆れた。

「エド、飲むだけじゃなくてちゃんと食べないと不健康よ」

「大丈夫だよ。ここは長屋だからね、誰かが料理してくれて分けてくれる。僕はお返しのためにお酒を用意してるの」

そう言っているそばから隣人たちが顔を出し、来客の存在に気づいて珍しそうに話しかけてくる。

あつという間に俺たちのことがニュースとなって長屋内に知れ渡り、これは歓迎会をせねば、とかなんとか誰かが言い始め、素朴な彼らはたちまちお祭り状態になった。

「娯楽に飢えた地域だからさ、悪いねえ」

時刻はちょうど夕食前。女どもが結束して料理に取りかかるらしい。準備の騒々しさを嫌った俺がふらりと戸外に出ると、エドが追いかけてきて苦笑した。

俺はその顔をすこし眺め、

「フローネはどうした？お前たち二人で話したいこともあるだろうと思って席を外してやったのに」

「あ、そう。お気遣いどうも。あの子は準備の手伝いをしてるよ。別に君にお膳立てされなくなっただって後でゆっくり話すさ。　とこるでフローネ、ちよつと元気ないね」

目の前の川原へといったん外した視線を再びエドに戻し、またすこしその顔を眺める。

「慣れない旅で疲れたんだろう」

「うーん。体調面なのかな。なんとなく表情がなあ。……まあいいか、君がついてるんだし野暮なお節介はやめとこ。昨晚君と盛り上がったって寝不足ってオチかもしれないしねえ？」

エドお得意の、にっこりと純真そうな笑顔と嫌味。

それはともかくとして、フローネに関しては鼻の聞く男だ。彼女の様子が気になったというのならば、俺の見落としていた何かがあったのかもしれない。長屋に戻ってさりげなく観察しようとしたが、フローネの姿を見た途端いろいろな懸案事項は吹っ飛んだ。

三角に折ったバンダナを頭に結び、借り物のエプロンをつけて、極めつけに手に包丁とジャガイモだ。

「あ、おかえりなさい」

なんだこれは。……料理なんか作れるのか？

思わず率直に口走ったのがまずかつたらしい。

フローネとエドがそろって目を怒らせ、「なんて無神経な」と噛みついてくる。

でも家事雑用をするのは下級使用人であり、高級使用人である侍女の仕事ではないのだ。王宮にて王太子妃の世話をしているフローネも当然、料理などしないはずである。だから驚いただけなのだが。

「フィール様は召し上がらなくて結構ですわ。どうせお口に合いませんもの」

娘はつんとして言い、エドも便乗する。

「そうだよ、フィール、君は食べなくていいよ。フローネは僕のために作ってくれたんだもんね」

ぴつたりと息を合わせて皮肉を浴びせる二人を前に、俺の弁解はむなしく弾き返される。

いつもこうだ。彼女が生きいきと腕を振るう光景に俺がどれだけ惹かれ、その食事に癒されたいと思ったか、うまく伝わることはない。

長屋の一同を巻き込んだ夕食が賑やかに始まると、たくさん並んだ皿の中から真っ先に愛しい娘の手料理を取る。晩秋の近いこの季節にはふさわしい煮込み料理。

柔らかく煮えた根菜類を匙ですくい、一口。

「……美味しい」

俺は曲がりなりにも詩人だ、あらゆる語句を総動員して、この味を称賛しなければならぬはず。定型化された修飾語を用いて、または自分で新しい表現を生み出して。

でも、エドと話しながらも気がかりそうに俺の反応を注視しているフロアーネへ向かって、俺がその場で口にできたのは直球すぎる一言だけで。

何のための言語能力なのかと自分の無粋さが嫌になった。
彼女はにっこりと微笑んでくれたけれども。

さて、料理が胃袋へ消えていくのと反比例して宴は徐々にヒートアップしていく。立ち上がってステップを踏み出したのは誰だっただろう。気づくと陽気な舞踊曲が奏でられ、廊下に出た人々はリズムを取って体を揺すっていた。もちろん音楽はエドによる生演奏だ。

「……………まあ……………」

熱気に圧倒されてフロアーネはあえかな吐息をつく。

ぼんやりとしたその瞳によく映るように、俺は手を差し伸べた。

「踊ろうか？」

「……………え？」

若夫婦は子どもを放り出して、腰の曲がった老人も杖を置き去りにして、俺たち以外は全員がすでに腰を上げていた。

分かりやすく誘ったにも関わらず娘の反応は鈍い。強引に手を取って踊り狂う輪のなかに入ったところによやく狼狽していたが、構うものか。狭い空間で何組もの男女がてんでバラバラに踊っているため棒立ちになっていては邪魔になり、ぶつからないためには自らも踊るしかないのだ。

「踊れませんよっ？テンポが速くて……………ステップも分からな……………」

訴えの最中に悲鳴をあげて倒れかかってくる。背後では悪気もなく裾をひるがえすおばさんの姿。

フロアーネを笑いつつも、一方の俺も悲惨な状況ではあった。「お上品」な舞踏会の経験など何の役にも立たない。まるで生きるか死ぬかの戦場のように、とにかく踊りまくった者が勝つのだ。

「無理です！こんなの、とても！」
フロアーネは戦意のかけらもなく早々に白旗を掲げてしまう。

「なんで。こんな弱肉強食的ダンスは他にないぞ」
俺もめまぐるしい曲調に体が翻弄され、まさしくてんでこ舞いな感じだったろうが、面白くて仕方なかった。けれど断続的にあがるフロアーネの悲鳴に折れて、彼女を保護すべく廊下の端に避難する。

「まったくお前は、弱いな……」
「……ええ申し訳ありませんね。わたしのことは捨て置いて、どうぞ踊ってきて下さい」

萎えた顔でそう言うと、フロアーネは踵を返す。皺のついてしまった藤色のスカートを捌きながら。

なんだか元気ないね、というエドの言葉が脳裏に甦ったのはそのときだ。

俺は本能的にその手首を捕らえた。

第20話(前書き)

たまには女の子視点もありけり。

第20話

わたし達の間にはちょっとした争いは絶えない。何しろフィールは時々やたらと冷たかったり意地悪になったりする人で、それも作爲的な場合もあれば無意識の場合もあり、とにかくすれ違いの種はバリエーション豊かに揃っている。そして彼の態度に文句をつけられる身分でもないフローネは、怒りを飲みこむことに慣れていた。

けど傷つかないわけじゃないよ。

いくら悪意がなくとも「お前は弱いな」っていうのは、それが事実であるだけに、胸がザツクリとえぐり取られたよう。

「ダンスの競争にさえ負けるんだから、あなたを取り巻く令嬢たちとの競争になんて挑むのも愚かなことですね。どうぞわたしのことはお気になさらず、楽しくやっていて下さい」

なんて、我ながら冗談では済まない嫌味が胃からせり上がってきたくらいだ。

どんな気持ちでわたしがこの地へ来たのか、洗いざらい告白してしまいたい。彼の暴言につけこんで、「あなたはわたしのことを何にも分かってくれてないわ!」とか責めてみたい。幸か不幸か後宮の女たちは恋愛物語が大好物で、自然とフローネもその類のセリフは知識として豊富に持っている。

今こそ実践に使ってみるべきかしら。常になく痛手を被ったフローネは気を紛らわすために茶化して考える。

相変わらず周辺で繰り広げられているドタバタ舞踊の喧騒が、どこか別次元のようだった。この混雑を面白がるなんて、ちっとも分

からない。やっぱりエドもフィールもどこか嗜好が変……いや、つまり、芸術家気質の持ち主ということだ、うん。

フローネは、エドが王宮に居た頃の静穏な夜が好きだった。エドが生活の場を故郷に戻し、フィールと自分の仲が進んでも、今日だけは当時の空気に浸れるはずだと思っていた。でもエドですら昔の音楽を聞かせてくれない。

感傷がこみ上げていつの間にか力が抜けていた。そんなフローネを黙って見守っていたフィールが、ここでようやく動いた。

「……気に障ったのか？……」

何を今さら。

だけど何しろ声が。甘くかすれた魅惑的な声が、まるで少年のようにおおずおと、機嫌を窺ってくるものだから。

フローネの弱くて柔らかい心は簡単にほどけてしまっただが、今度は負けるまいと、強いて背後のフィールを無視した。

激しい踊りを満喫して、ちらほらと休息に向かう男女の姿も見られ始めた。エドは場の空気を読み、やや曲調を緩める。

「フローネ」

反応がないと知ると次にフィールは掴んだ手首にぐっと力を込めてきた。そして強引に体を引き寄せる。といっても力任せということではなく、ただ彼の手が腰に添えられただけでフローネは自然と従わされてしまうのだ。

間近な位置に来てしまったその顔をつい習慣で見上げてしまい…後悔した。

エメラルドグリーンの光を固めたような瞳。言葉に置き換わらない思いがもどかしくくすぶり、秀麗な瞳がもの言いたげに揺れている。

そりゃもう、壮絶に色っぽくて、悩ましくて。

ああこんな目を見るんじゃないやなかったと一瞬思ってしまった。だっていとも容易く籠絡される自分の弱さを露呈してしまうことになる。

フローネは唇を噛みしめ直し、わざとらしく視線を外してみせた。逃がした目線の先にこちらの様子を気にしているエドの姿が飛び込んできた。エドは「やれやれ」というようなおどけた表情でフローネに笑いかけ、明るい演奏を続けている。

「悪かったよ……。少しはおまえを思いやれとエドにも説教されたんだが、ちつとも果たせていないな。本当におまえには悪いと思っ
ているんだ、それでも」

彼の声が空気のゆらぎとなってフローネの頬にあたり、フローネの目を泳がせる。

なおも言い募ろうとする彼の気配を察知するやいなや、フローネは「もう結構です。やめて下さい！」と言葉を封じた。

可能なら今度こそ彼をなじりたかった。こんな時に誠実に謝らないで。いつそすれ違ったままでいさせて。でないとフローネの脆弱な心は彼を許してしまうだろう。今、それはとても苦痛だった。うん、許すのは簡単だけど、その後を訪れる平和な時間がやるせなくなるに違いなかった。

「懲りないね、君たちったら。早く仲直りしてよ」

カラリとした質感の声とともに、いつの間にか傍に来ていたエドが遠慮なく俺と彼女の顔をのぞきこむ。もちろんとつくに演奏は途切れていた。

フローネはエドを困ったように見返した。俺の謝罪を突っぱねようともし、エドの介入は拒絶しかねる様子だ。どうやらエドの勝ちらしい。早々に情勢を見定めた俺は、親切なる友人が「この朴念仁に腹を立てるだけ無駄だ」というようなことを嬉々として語り、見事にフローネを言いくるめるのを眺めていた。

「まあ納得しなくてもいいからさ、せめて僕の前でのケンカは収めてくれよ。せつかく会えた旧友としては険悪な君たちなんて見たくないよ」

そこまで言われてようやくフローネは俺の謝罪を受容したが、まだ腰に巻きついたままの腕が気に入らない、と俺からの解放を求めてきた。

どうやら予想以上に怒らせてしまったらしいなと今になって悟ったが、しかし硬い表情のその奥には、嫌悪感ではない何か、もっと甘い色合いの何か潜んでいるような気がして、それを頼みに要求を無視する。むしろここで放したりしたら、俺たちの間に消えない亀裂が入りそうだった。

「口直しに踊るか」

「……まだ踊るんですか」

勝手にやれと言われる前にエドに曲名を告げ、すっかりスペースの空いた廊下の中央へ彼女を連れて行く。強引なのは百も承知だ。

音が流れはじめた。王都の舞踏会では定番のワルツ。本来はオーケストラによる、スケールの大きな華々しい曲だけど、演奏者がエド独りの今宵は主旋律のみが伸びやかに響く。

「なんとなく踊れるだろう？この音楽なら」

田舎の住人たちが一様に口をポカンと開けて見惚れる中、フロアーは俺のリードのままにターンを決めて、俺の懐へ戻ってくる。スカートがふんわり膨らんでいかにも優雅だが、内実は、いつも相手にしている女性たちより初々しくて何倍も気を遣わされる。

「無理ですわ。上手く踊れません。この音楽でも……」

主人の舞踏会にお供する機会はいくらだろう。だが耳に馴染んではいても、体に沁み込んでいるのとは違う。フロアーはお手本のような貴族のダンスを知っている分、自分の動きを拙く思うようだった。

右に、左に、半回転。彼女のステップはほんの一瞬遅れて、しかし一途に俺についてくる。「もう嫌だ」という意思表示があれば即座にやめるつもりで待っていたのに、メロディーはまだ流れ続ける。

「上手く踊る必要はないだろ？満足できれば」

「フィール様はこれで満足なさるんですか」

返事の代わりに微笑むと、絡み合った手の指先にぎゅっと力がこもるのを感じた。

「人前で、お前を相手にダンスをする日が来るとは思わなかったんだ」

俺の脳裏に、兄との会話がふと甦った。

「……俺も迷ってはいるんだ、兄上。例えばあいつに綺麗なドレスを着せて舞踏会にエスコートする夢を見ないわけじゃない。でも、そうすると途方もない重圧があいつに掛かり、必ず傷をつける。」

身分違いの恋なんてのは、貴族界ではよくある話だ。もちろん大半は恋人や愛人レベルだが、中には正式に結婚してしまう例もある。周囲の反対を押し切ってしまうえば、舞踏会にエスコートするのだって不可能ではない。

彼女がもうすこし打たれ強い性格ならば、その道を行ってもよかった。

だけど誓って俺はフローネの弱さを責める気はない。世の中には傷ついてもめげずに立ち向かえる人もいれば、そうはいかない人もいる、ただそれだけのこと。

むしろ彼女は俺に、愛すべき弱さというものを教えてくれた。

「俺と踊るのは嫌だったか？」

あと三小節で曲が終わる、その瀬戸際に短く尋ねた。

ダンスの間ずっと羞恥・困惑・必死ばかりで、ようやく終着だと息を抜いたに違いないフローネは、なんとも複雑そうな顔をした。

「嫌だったと言っていないぞ、遠慮なく。まあ言えないところがお前

のお前たる所以だが」

優しすぎるから人を押しつけられないのだ。
だからこの娘が愛おしい。

周辺から一斉に感嘆と拍手が湧いたことで三小節が通り過ぎたことを知り、我に返って娘の肩を抱き直したときだ。小さな声が聞こえた。

「いいえ。夢みたいで……」

愛^{かな}

しかった」

第20話（後書き）

Q・なぜ急に女の子視点が？

A・フィールーがあまりにも女心を解さないため、このままではフロ
ーネの心理が伝わらなかつたから（汗）

フィールーよ、事態は君が思っているより深刻ですぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7730n/>

月下に待つ

2011年6月28日18時43分発行